

総合型選抜・ 学校推薦型選抜の 指導のポイント

大学入試改革の進行や、18歳人口の減少、受験生の安全志向の高まりなどを背景に、総合型選抜・学校推薦型選抜（以下、総合・推薦型選抜）での大学受験を考える高校生が増えています。

総合・推薦型選抜には、一般選抜とは異なる特徴があり、指導の両立に不安や負担を感じる学校も少なくありません。また、担任や進路指導部に負担が集中する、生徒が安易に受験を考えてしまうといった課題も見られます。

今回の特集では、全体指導との連携や個別指導の体制構築などを工夫する、先進校の取り組みを紹介します。

CONTENTS

Part 1

総合型選抜・学校推薦型選抜の現状と指導のポイント

→ p40

- 総合・推薦型選抜の募集人員の動向
- 選考方法の特徴
- スケジュール
- 総合・推薦型選抜で求められる資質・能力
- 高校における指導のポイント
- 河合塾の取り組み

Part 2

取り組み事例

→ p48

- 山形県立山形東高校 → p48
- 岐阜県立加納高校 → p56
- 茨城県立太田第一高校 → p64
- 福岡県立城南高校 → p52
- 岐阜県立長良高校 → p60

参考情報

Guideline2022年7・8月号 「高校生の探究活動と進路選択」

- 総合・推薦型選抜を中心に、探究活動の過程や成果を評価する大学入試の事例を紹介
- 探究活動を進路選択につなげていく先進事例を紹介



Guideline2022年10・11月号 「学力観の変化と学びみらいPASS」

- 総合・推薦型選抜で求められる、多面的な資質・能力の育成と評価の事例を掲載
- 13校の具体的な活用事例を紹介

※Kei-Net（河合塾の大学入試情報サイト）にて記事の全文を公開

河合塾 ガイドライン



入試の多様化を背景に指導の再検討が必要に

Point

- ✓ 総合・推薦型選抜の定員・入学者が年々増加
- ✓ 大学によって多様な選考方法
- ✓ 全体指導への位置づけ、個別指導の負担軽減が重要に

総合・推薦型選抜の募集人員の動向

大学入試改革や18歳人口減などを背景に
総合・学校推薦型選抜へのシフトが進む

近年、総合型選抜・学校推薦型選抜（以下、総合・推薦型選抜）を希望する生徒が増えていると感じる先生が多いのではないかと。

<図表1>を見ると、大学入学者に占める総合・推薦型選抜の割合は、ここ20年で国公立大で1割強→2割強、私立大では4割弱→6割弱へと増加している。

総合・推薦型選抜の募集人員も、年々増加している。

<図表2>は、2022年度入試における選抜方法別の募集人員を示したものである。総合・推薦型選抜が占める割合は、国公立大が2割強、私立大が5割弱となっている。

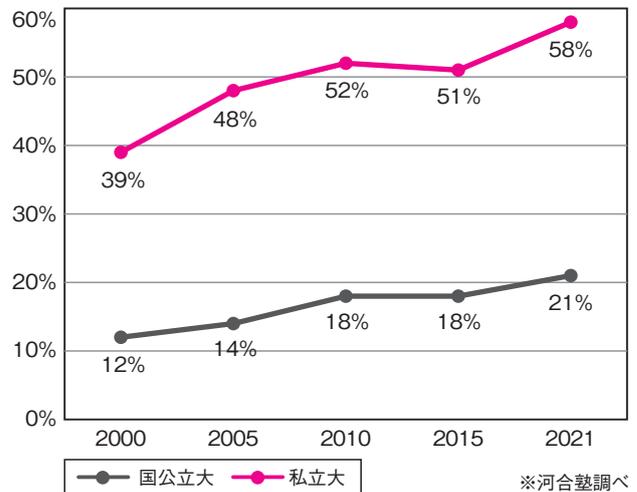
大学グループごとに状況は異なり、国立難関10大学では、その割合は1割程度である。東京大学が学校推薦型選抜、京都大学が特色入試を導入したことが大きな話題となったが、募集人員に占める割合はそれぞれ3%、5%に過ぎない。

私立大は、大学難易度が低いほど総合・推薦型選抜の割合は高まる。ただし、偏差値55以上の大学でも4割弱が総合・推薦型選抜の募集人員にあてられている。

また、今後は総合・推薦型選抜の割合はさらに高くなる見込みだ。<図表3>は、中長期（今後5～10年後）の選抜方法別の募集人員の方向性である。国公立大では約2割、私立大では3割強が、総合・推薦型選抜の募集人員を中長期的に増やす方向である。一方で、一般選抜は私立大は1割が減らす方向と回答。一般選抜から総合・推薦型選抜へのシフトがさらに進むと見られる。

総合・推薦型選抜を増やす理由としては、次のようなものなどが挙がる。

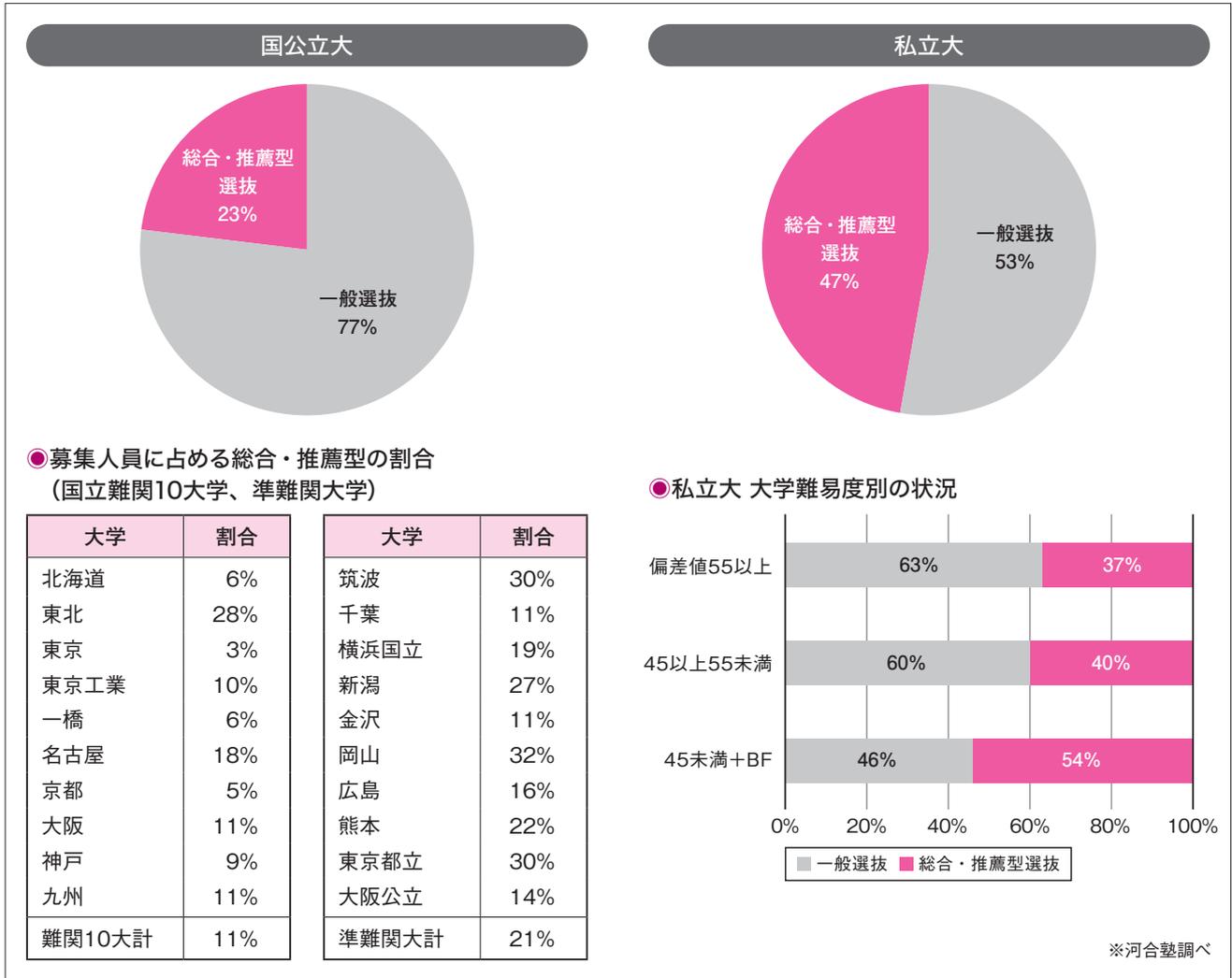
図表1 大学入学者に占める総合・推薦型選抜の割合



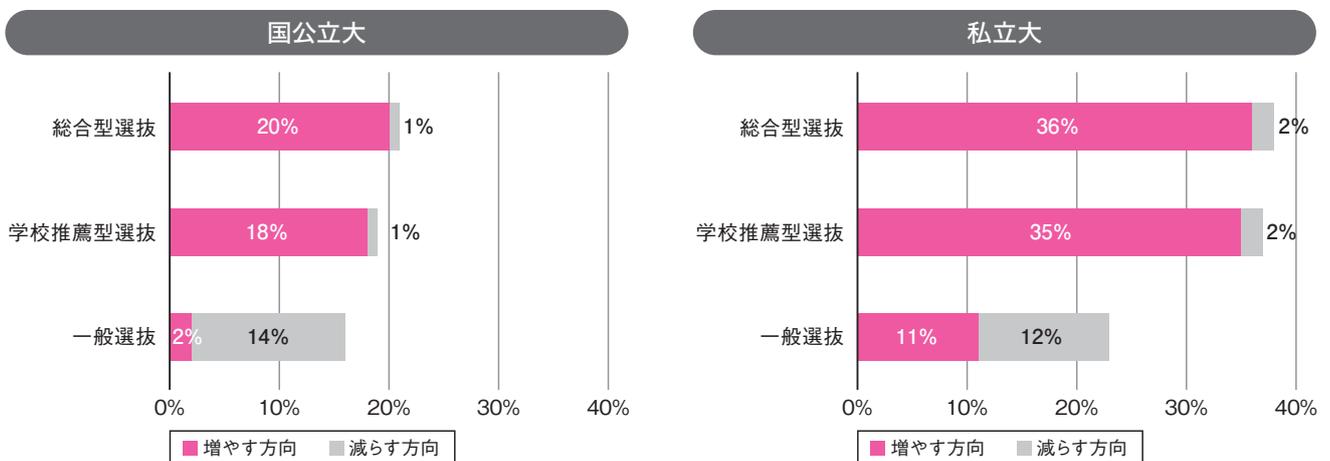
- 多様な学生を入学させたい
- ペーパーテストでは測定困難な資質・能力の評価
- アドミッション・ポリシーに合った学生の確保
- 第一志望で入学する学生の確保
- 総合・推薦型選抜での入学者の大学での成績が良い
- 一般選抜での入学定員充足が困難
- 入学者の早期確保
- 受験生の入学先決定早期化への対応
- 他大学の総合・推薦型選抜の拡大への対応
- 国立大学協会方針（総合・推薦型選抜での入学者3割をめざす）への対応
- 高大連携・高大接続の強化
- 他地域への若者の流出の抑制

理由は大学によりさまざまだが、より多様性のある学修集団を形成するため、あるいは安定的に学生数を確保するため、総合・推薦型選抜を活用しようとする動きが見られる。

図表2 2022年度入試 選抜方法別募集人員

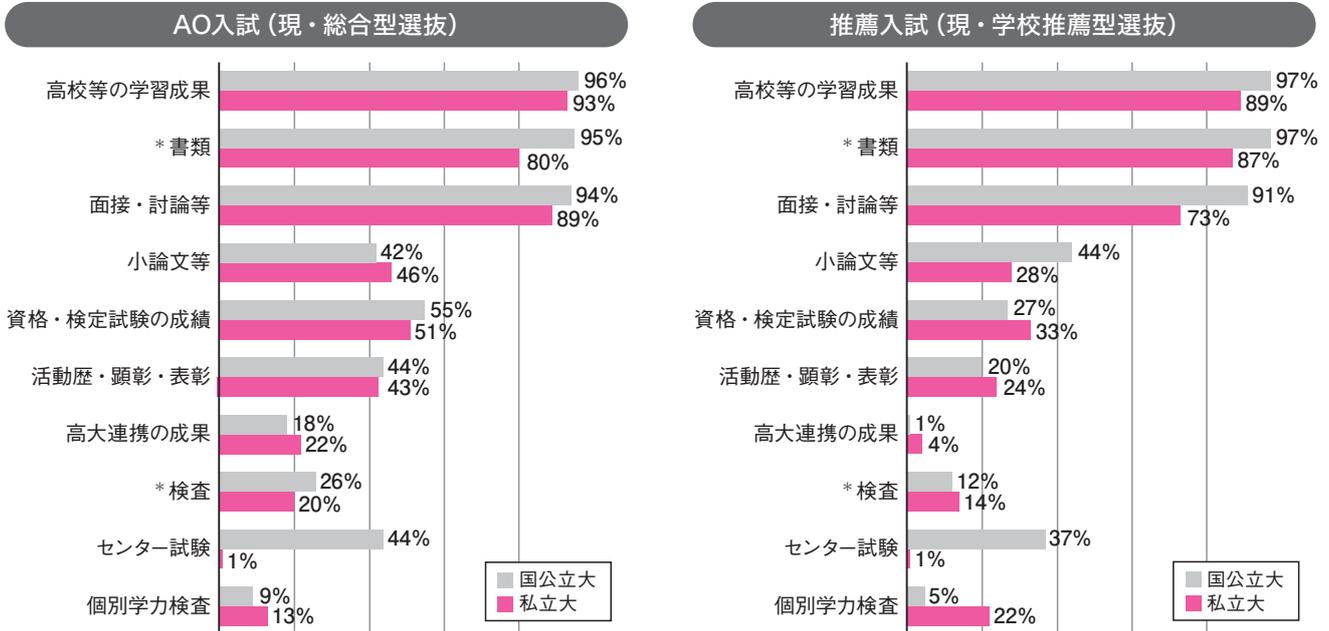


図表3 今後の選抜方法別の募集人員



※朝日新聞×河合塾「ひらく 日本の大学」2022年度調査（2022年6～8月に実施）より。グラフは、「現状維持」「未定」等を除外して作成。

図表4 AO入試、推薦入試の評価方法(2020年度)



*書類…推薦書・志望理由書・活動報告書等

*検査…基礎学力把握のための簡易な検査・適性検査・実技検査等

※文部科学省「大学入学者選抜における英語4技能評価及び記述式問題の実態調査の結果(令和2年度)」より作成

※数値は2020年度入試に関するもので、複数回答あり

選考方法の特徴

多様な評価方法を組み合わせて選抜

共通テスト等で学力把握を行う大学も増加

総合・推薦型選抜では、受験生の資質・能力を多面的に評価する、丁寧な選抜が行われる。

<図表4>は、2020年度入試におけるAO入試(現・総合型選抜)、推薦入試(現・学校推薦型選抜)での評価方法を国公立大・私立大に分けて集計したものである。

高校等における学習成果は、ほとんどの大学で評価する。学力検査以外に考慮する資料等の利用率(AO入試(推薦入試)で表記、以下同じ)は、調査書が93%(91%)、高校等の教科の評定平均値が74%(83%)、探究的な学習等に関する資料44%(34%)となっている。

書類も課されることが多い。大学入学希望理由書、学習計画書等が81%(60%)、活動報告書が38%(16%)、推薦書等が16%(86%)で、複数の書類の提出を求める大学がほとんどである。

面接・討論等と小論文等は、総合型選抜、学校推薦型選抜ともに課す大学が多い。

割合は低いですが、総合型選抜では**高大連携の成果**を評価

対象とする大学が見られる。総合型選抜では模擬講義等(実験等を含む)の受講を要件とする選抜区分が14%、事前課題を課す選抜区分が11%を占める。金沢大学のKUGS特別入試、桜美林大学の探究入試Spiral、お茶の水女子大学の新フンボルト入試などがその好例だ。これらの概要はGuideline 7・8月号「高校生の探究活動と進路選択」で紹介しているので、ご参照いただきたい。

注目したいのが、**大学入学共通テスト**(以下、共通テスト)や**個別学力検査**などによって、**教科等の学力を評価する大学が増えていること**だ。国公立大は、総合・推薦型選抜ともに約4割の選抜区分で共通テストを課している。

特に総合型選抜では、複数の評価方法を組み合わせ、丁寧な選抜が行われることが特徴だ。国公立大や難関私大では、多段階選抜が行われる場合がある。**<図表5>**のように、**1次選考の通過率が非常に低い場合もある**ので、出願の際は注意が必要である。

一方で、受験生の大学や選抜方法への理解を深めることを目的として、中堅私大を中心に、正規出願の前に事前面談や面接を実施する場合もある。受験を考える生徒には、これらの機会の利用も勧めたい。

図表5 難関国立大総合型選抜の1次選考の合格率 (2022年度)

大学	学部・学科	1次合格率
東北大	文Ⅱ期	43%
	教育Ⅱ期	67%
	法Ⅲ期	71%
	医－医Ⅲ期	49%
	薬	75%
	工Ⅲ期	82%
	農Ⅲ期	77%
筑波大 (AC入試)	人文・文化	27%
	情報	26%
	体育専門	26%
京都大	教育	52%
大阪大	人間科学	56%
	外国語	83%
	理(挑戦型)	55%
神戸大 「志」特別選抜	文	44%
	法	23%
広島大	総合科学Ⅰ型	61%
	教育Ⅰ型	92%
	教育Ⅱ型	85%
	文Ⅱ型	56%

※栄美通信 全国大学・短期大学総合型選抜年鑑(2022年度発行版)より

スケジュール

長期間にわたり丁寧な選抜を実施 一般選抜対策との両立も課題に

<図表6>は、国公立大の総合・推薦型選抜の一般的なスケジュールを図示したものである。

出願受付は総合型選抜が9月以降、学校推薦型選抜が11月以降とされているが、夏休みにはスクーリングや事前面談などが始まる。

合格発表の期限は、共通テストの利用の有無によって異なる。

(利用なし) 一般選抜試験日の10日前

(利用あり) 一般選抜試験日の前日まで

特に共通テストを利用する総合・推薦型選抜は、一般選抜と比べて早期に合格が決まるわけではない。

また、不合格になった場合の一般選抜への切替も考えると、共通テストを利用しない総合・推薦型選抜を受験する場合も、1～2月まで教科の学習を続けることが求められる。

このように、総合・推薦型選抜を受験する生徒は早期から、また長期にわたり大学入試を意識した学習を行うことになる。かつての状況から、総合・推薦型選抜は受かりやすいイメージを持つ生徒も少なくないが、特に国公立大や難関私大は非常にハードな選抜が行われていることに注意したい。

図表6 国公立大の総合・推薦型選抜のスケジュール



総合・推薦型選抜で求められる資質・能力
主体性・多様性・協働性を中心に
幅広い資質・能力を評価

総合・推薦型選抜では、資質・能力の三つの柱のうち、「思考力・判断力・表現力等」や「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」の評価を重視することが多い。

東北大学のアドミッション・ポリシー（AP）<図表7>を見ると、AO入試では評価の対象となる資質・能力として下線のようなものが挙げられている。

では、実際にはどのような受験生が合格しているのか。<図表8>は、東北大学のAO入試の合格者・不合格者について、河合塾の「学びみらいPASS」（詳細はGuideline 10・11月号参照）の結果を比べたものである。

リテラシーは、「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」ともに、合格者が不合格者を上回っている。まさにAPで挙げられているような、論理的な思考力・判断力・表現力が高次に備わっている受験生が合格していると考えられる。

コンピテンシーは「計画立案力」や「実践力」で、合格者が不合格者を上回っており、次のような行動特性を持った受験生が合格しているようだ。

- 明確な目標を設定し、条件やリスクを想定しながら実現までの計画を立てる
- 計画を進んで実行し、状況に応じて柔軟に行動を修正
- 次の行動に向けての振り返りを行う

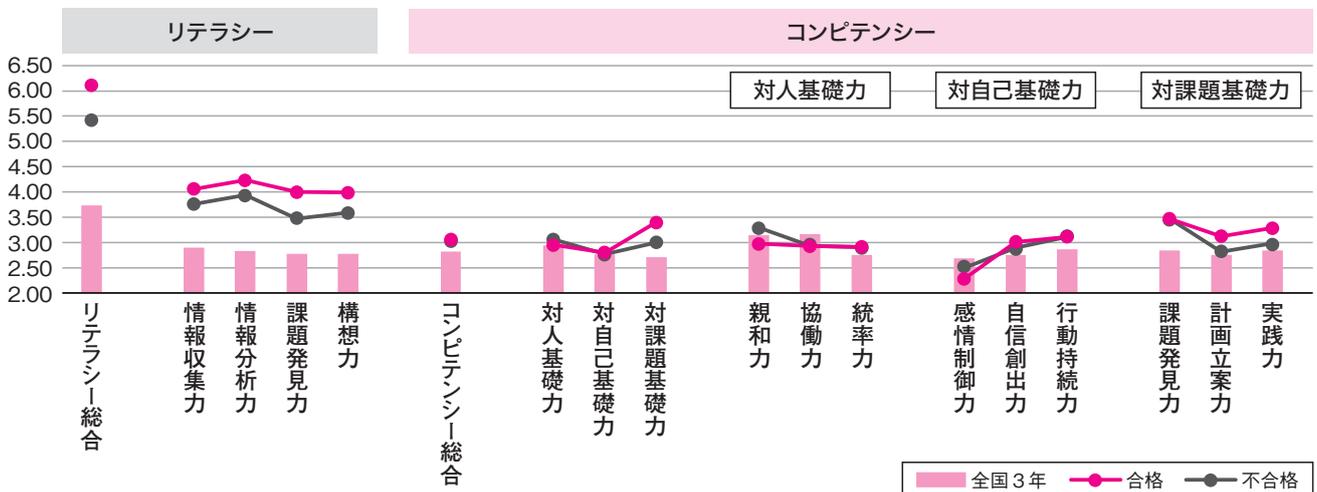
なお、東北大学のAO入試受験者の場合、不合格者もコンピテンシーの「課題発見力」は非常に高い。学校での探究活動や自主的な活動の中で、課題を明らかにし、原因追究することに積極的な生徒が出願していることが伺える。

また、東北大学の場合は合格者・不合格者にあまり差がついていないが、「自信創出力」が低い生徒は自分を前向きに持っていくことが苦手な傾向がある。もし、総合・推薦型選抜で良い結果が出なかった場合、一般選抜に向けた切り替えで苦勞することも考えられるので、出願の際には注意したい。

図表7 東北大学のアドミッション・ポリシーより

一般選抜
5～6教科7科目の大学入学共通テストで幅広い知識・技能を含む基礎学力を評価するとともに、（中略）個別学力試験で、本学の学修に適合する思考力・判断力・表現力等を含むより高い学力を測る試験を行い、これらを主たる選抜資料として合格者を判定します。判定においては個別学力試験の成績を重視します。 さらに、調査書と対応したチェックリストにより主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を確認する（後略）。
AO入試（総合型選抜）
高等学校における学業成績や大学入学共通テスト、個別の筆記試験、面接試験や出願書類の審査等による選考を行います。 この選考では幅広い知識、技能を含む基礎知識や論理的な思考力・判断力・表現力、コミュニケーション能力等の学力とともに、豊かな人間性や創造力、発想力、倫理性、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、学問に対する好奇心などを評価します。 学力については、一般選抜と同等以上の水準を求めます。

図表8 東北大学AO入試受験者の高3時におけるジェネリックスキル平均（2019～2022）



※河合塾調べ

高校における指導のポイント

進路等の全体指導の中に位置づけつつ

個別指導の負担軽減を図ることが重要に

総合・推薦型選抜の指導では、＜図表9＞に挙げるようなさまざまな教育活動が求められる。

一般選抜を念頭に置いた指導とは進路指導や学習指導のポイントとは異なる部分もあり、総合・推薦型選抜の指導に不安や負担を感じる先生方も少なくない。

今回取材した5校は、「全体指導」への位置づけと、「個別指導」の体制構築、「出願指導」の徹底などにより、指導の充実と負担の軽減・分散を図っていた。

◆探究学習やキャリア教育の全体指導への位置づけ

- 3年生全員が、探究学習の集大成として志望理由書の作成と模擬面接を経験。一般選抜の志望者の学習意欲も高める（山形東高校）
- 進路行事ごとにリフレクションシートを書いて蓄積し、志望理由書や面接の「引き出し」とする。2年次冬に全員が、ワークシートを使って志望理由書を作成（城南高校）
- 3年生全員が小論文・面接の講演を受講（長良高校）
- 1・2年次に全員が小論文テストを受験。3年次に

は「思考力・表現力テスト」を受験し、結果を調査書の記載にも活用（太田第一高校）

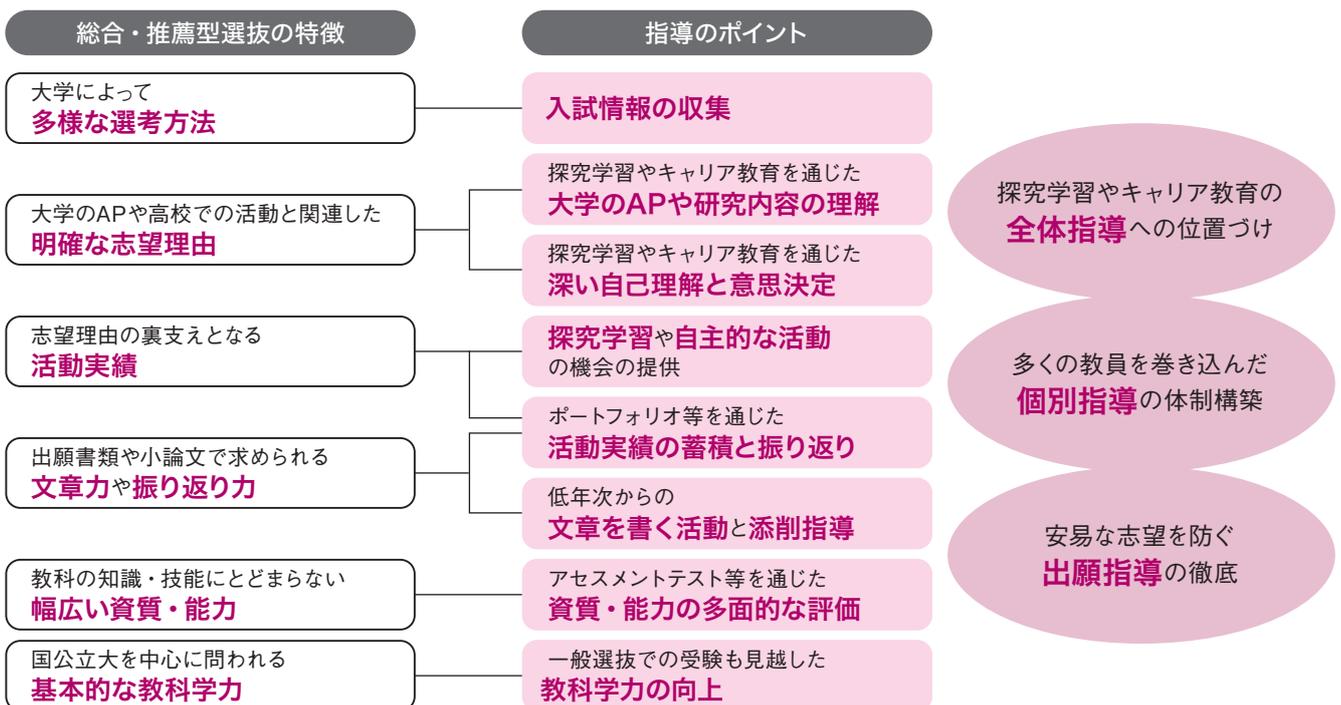
◆多くの教員を巻き込んだ個別指導の体制構築

- 教員に担当希望分野のアンケートを取り、学年や教科を超えて小論文・面接を指導（加納高校）
- 小論文・面接指導研修会を実施。ベテランの指導を職員室で見て若手教員も指導法を学ぶ（長良高校）
- 全教科・全学年の教員が小論文指導を担当。キャリアサポート部が、大学の出題傾向に合わせて担当教科を決定（太田第一高校）

◆安易な志望を防ぐ出願指導の徹底

- 総合・推薦型選抜の厳しさも伝え、覚悟を持った生徒のみがエントリー（城南高校）
 - 学びみらいPASSのスコアが高い生徒の背中を押すとともに、低い生徒には出願の覚悟を確認（加納高校）
- いずれの高校も、総合・推薦型選抜の指導を通じて、一般選抜とは異なる特性を持った生徒が志望大学に合格できる、一般選抜志望者も進路意識や学習意欲が向上する、教員の指導力が向上するといった効果を挙げた。
- 具体的な取り組み内容は、それぞれの事例のページをご参照いただきたい。

図表9 総合・推薦型選抜の指導のポイント



河合塾の取り組み

大学情報の提供、出願書類・小論文対策のほか 生徒が進路を考える機会を提供

総合・推薦型選抜を希望する生徒が増えてくると、進路指導や学習指導の大幅な見直しが必要になったり、先生方の負担が増えたりする場合があります。河合塾では、総合・推薦型選抜を志望する高校生や、指導する先生方を支援するため、さまざまな取り組みを行っている<図表10>。高校での指導と合わせて、ご活用いただきたい。

◆入試情報の提供

河合塾の大学入試情報サイト「**Kei-Net**」の「大学検索システム」に、主要大の総合・推薦型選抜の情報を掲載。

◆学べる大学・学部、学問・研究内容の提供

学問・大学選び支援サイト「**みらいぶっく**」に、学問分野から学べる大学・学部、仕事・業界と学問・学部選び、最新研究、学問と出会う本など豊富な情報を掲載。

◆自己理解や探究学習のテーマを考える機会の提供

学校向け進路探究プログラム「**ミライ研**」を提供。「未来」を学びの素材として、進路探究（職業や自己に対する探究）を行う。課題別に活用できる「3つのプログラム」と定期的な「教員向け勉強会」をご用意し、総

合的な探究の時間の授業作りと進路指導をサポート。

個人向けサービスとして、「**河合塾みらい探究プログラム (K-SHIP)**」を実施。オンラインで実施し、全国の中高校生が参加できる。(次頁参照)

◆ポートフォリオを通じた活動実績の蓄積と振り返り

学校向けeポートフォリオシステム「**まなBOX**」を提供。総合・推薦型選抜に必要な書類作成時の参考資料にすることができるほか、指導改善の材料ともなる。

◆文章を書く活動と添削指導

小論文や記述式問題で求められる「思考力・表現力」を育成・測定する「**思考力・表現力シリーズ**」を学校向けに提供。読み・考え・書く力を育成する「思考力・表現力ワーク」をはじめ、それらの力を測定する添削指導付きの「思考力・表現力テスト」など4つの商品で構成されている。

◆資質・能力の多面的な評価

「新しい学力」を評価する「**学びみらいPASS**」を学校向けに提供。詳細はGuideline10・11月号を参照。

◆総合・推薦型選抜を考える高校生の総合支援

首都圏・近畿地区の校舎では、2023年度高校グリーンコース（高3生）において、「**総合型・学校推薦型選抜対策プログラム**」を開講。志望大学の選考方法に応じた対策をできるようにしている。(次頁参照)

図表10 総合・推薦型選抜のポイントと河合塾の取り組み



(学校向けサービス)

春プログラム
2月8日受付開始

河合塾みらい探究プログラム K-SHIP (中3～高2生対象)

河合塾では本格的な大学入試対策の学習に臨む前の、中3生～高2生を対象に「みらい探究プログラム(K-SHIP)」という取り組みを始めました。

プログラムの内容は大きく3つに分かれています。

- ①教科の本質をとらえ、理解を深めるような内容を提供し、学びの動機づけにつなげるプログラム
- ②自分の進路や将来を考えるために、生徒が身近に感じるテーマ、あるいは宇宙や新型コロナなど文理融合・今後の社会を変えていくようなトピックなどを取り上げて、大学教員など専門家に講演していただくとともに、自分の進路選択にもつなげるプログラム
- ③探究的な学習プログラム

総合・推薦型選抜には②と③が直接関連しています。

②は大学・学部・学科の選択および志望理由を明確化することに直接役立ちます。③は、探究学習の基礎的な内容や活動内容を、総合・推薦型選抜で活用できるようにブラッシュアップすることをめざします。

「みらい探究プログラム」は、対面ではなくオンラインで受講できるため、ご自宅から受講できます。主に長期休暇中に開講し、忙しい高校生にも受講しやすい環境

です。そして、グループ学習を多く取り入れ、全国の受講生同士で交流する機会を設定し、受講生自身の気づきと学びを促します。ぜひ生徒さんにご紹介ください。

「2023春みらい探究プログラム」の内容は、河合塾みらい探究プログラムK-SHIPのWebサイト (<https://www.kawai-juku.ac.jp/event/spc/k-ship/>) をご覧ください。2月8日から受付開始予定です。

河合塾 K-SHIP



2023春 みらい探究プログラムテーマ(予定)(抜粋)

- 東大模試から学ぶ！ 現代文読解のコツ
- 小説だよ！全員集合ーセンスに頼らない読みー
- データ分析～データを通して未来を読み解く
- 『読める』『書ける』論文・レポート
～これで完璧！ 論理のデザイン～
- めざせ！総合型選抜
～自分の探究活動をブラッシュアップしよう～
- 好きから考える私の将来ー“テーマパーク”

2023年度開講

総合型・学校推薦型選抜対策プログラム(高3生対象)

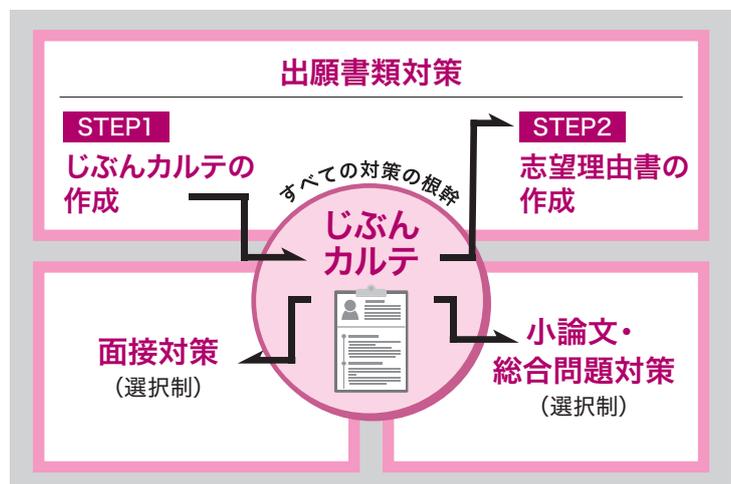
首都圏、近畿地区で、2023年度の高校グリーンコースにおいて開講^(※)。

「出願書類対策」を基本として、大学の選抜方法に応じて「面接対策」「小論文・書類対策」を組み合わせ、一人ひとりにぴったりのプログラムで対策できます。

志望理由や大学で学びたいこと、将来のビジョンやこれまでの活動履歴などを、講師と一緒に自己分析をしながら、「じぶんカルテ」を作成。「じぶんカルテ」をベースに、志望理由書の作成や面接対策、小論文・総合問題対策を進めます。

さらに、レベル講座英語資格・検定試験対策講座、共通テスト対策講座も組み合わせて教科学力向上に向けた対策もできます。

各校舎での開講状況は、河合塾のWebサイト (<https://www.kawai-juku.ac.jp/hgreen/curriculum/recommendation/>) をご参照ください。



※レベル講座(対面)を1講座以上受講している方が対象。

独自の探究プログラムで「自己の理解」を促し深め 東京大・東北大などの総合・推薦型選抜に多数合格

山形県立山形東高等学校

Point

- ✓ 「自己探究」により探究活動での学びを自己の在り方・生き方につなげる
- ✓ 「志望理由書」「模擬面接」を3年生全員に課し、自分の考えを明確にする
- ✓ 全体への指導を重視し、個別指導を減らす工夫を行う

生徒の約3割が総合・推薦型選抜を希望

山形県立山形東高校は例年、東京大学・京都大学・東北大学をはじめとする難関国立大学への合格者をコンスタントに輩出する、東北でも屈指の進学校である。2018年度には普通科6クラスを普通科4クラス・探究科2クラス（理数探究科・国際探究科）に改編した。そして2021年度入試では探究科の第1期生が、東京大学の学校推薦型選抜に初めてチャレンジし、出願した3名全員が合格した。県内初であるのはもちろん、全国最多という快挙だ。

探究科の設置を機に、同校では探究活動や探究型学習を通じて得られた学び・経験から「自己の在り方・生き方」を見出していくことを目標とした取り組み『山東探究塾』（総合的な探究の時間）をスタートさせた。この取り組みは探究科の生徒のみならず、普通科も含めた全員が対象である。進路指導主事の棚村好彦先生は次のように説明する。

「本校では進学校として、普通科・探究科の区別なく、全員が一般選抜で勝負できる学力を身につけられるように、“授業中心主義”を徹底しています。そのスタイルを崩さずに、全員が教科の枠を超えた『山東探究塾』で探究スキルを習得し、社会の変化に柔軟に対応できる思考力・判断力・表現力を育てようと考えました。そうした体制を固めていく中で、総合・推薦型選抜にチャレンジする生徒が徐々に増えてきたというのが現況です」

山形東高校の進路実績を見ていこう。探究科第1期生が臨んだ2021年度入試では、東京大学に5名（うち学



進路指導主事
棚村好彦 先生

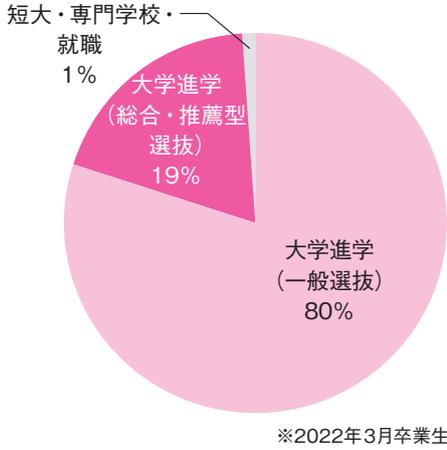
教育企画課長
佐々木隆行 先生

校推薦型選抜3名)、京都大学に2名（うち特色入試1名）、東北大学には36名（うち総合型選抜21名）が合格。翌2022年度入試では東京大学に9名（うち学校推薦型選抜1名）、京都大学に2名（うち特色入試1名）、東北大学に38名（うち総合型選抜11名）が合格している<図表3>。このように難関大学の総合・推薦型選抜で多数合格者を輩出しているが、特筆すべきは東京大学や東北大学などで一般選抜の合格者も増えているという点だ。東北大学志望者は毎年約100名ほどであり、同校で最も志望者が多い大学であるが、2022年度入試の東北大学合格者は近年で一番の実績だという。

棚村先生によれば、総合・推薦型選抜にチャレンジすることで、その大学を志望する思いが強くなり、一般選抜にもつながってくるのではないかと。

「総合・推薦型選抜を希望するのは1学年240名のうち3割程度です。東北大学の場合は『AO入試（総合型選抜）』を実施していますが、共通テストを課さないAO入試Ⅱ期を出願した生徒が2021年度入試は20名、2022年度入試は25名、2023年度入試は33名と、チャレンジする生徒は増えています。共通テストを課すAO入試Ⅲ

図表1 進路決定者(173名)の内訳



図表3 主要国公立大学の進学実績

大学名	20年度入試	21年度入試*	22年度入試
東京大学	4 (0)	5 (3)	9 (1)
京都大学	0 (0)	2 (1)	2 (1)
東北大学	23 (7)	36 (21)	38 (11)
国公立大合計	113 (22)	136 (40)	124 (21)

※既卒生を除く。()内は総合・推薦型選抜での進学者
*探究科1期生が受験

期でも志願者が明らかに増えました。東京大学の学校推薦型選抜に3名合格が出たという実績が大きな刺激になったこともあるでしょうが、一般選抜をめざせる学力を養いつつ、『山東探究塾』を通して培う『自己の理解』が、総合・推薦型選抜に対するチャレンジ精神の高揚という形で現れてきているのではないかと受け止めています」

自己理解と進路探究を促す
『山東探究塾』3年間の流れ

<図表4>は、『山東探究塾』の3年間の流れだ。

1年次には、普通科・探究科ともに、「総合的な探究の時間」を中心に基礎的探究スキルを学ぶ。さらに職業観の涵養を目的とした各種講義(各大学の学部説明、OBによる学部紹介の座談会や職業人講話、地元企業訪問など)も実施する。「将来社会に出ていくに当たって、ど

図表2 3年間の主な進路指導の流れ

学年	時期	指導内容
高1	前期	【キャリア教育】 職業人(OB)講話(6~7月) 郷土研修(地元企業訪問)(9月)
		【学問領域研究】 オープンキャンパス参加(7~8月) 東北大学研修会(大学教員からの学部学科紹介・模擬講義)(8月) 大学生(OB)との座談会(8月)
	後期	文理選択(11月)
		合格体験報告会(3月)
高2	前期	オープンキャンパス参加(7~8月)
		志望理由書(1回目)作成(全員)(7~8月)
		大学生(OB)との座談会(8月・12月)
	後期	総合・推薦型選抜希望者調査(~3月:東京大学・京都大学指導開始)
高3	前期	合格体験報告会(3月)
		志望理由書(2回目)作成(全員)(3~4月)
	後期	小論文指導(希望者)開始(4月~)
		模擬面接実施(全員)(5~6月)
		総合・推薦型選抜希望者(東京大学・京都大学以外)指導開始(6月~)

※この他、面談や志望別集会、講習、校内学力考査(1・2年生は年5回、3年生は年4回)等を実施。

図表4 3年間の探究活動の流れ



※2022年度入学生からは、理数探究科は「課題研究」(専門教科「理数」)が「理数探究」(共通教科「理数」)に、国際探究科は「SG人文ゼミ」が「国際探究」(「総合的な探究の時間」の一部)に変わる。

んな意識を持つことが大切か、そのために高校で何を頑張るべきかなどの心構えを指導します。また、そもそも学問とは何かといった、学びの本質についても考えさせます」(柵村先生)

2年次は、個人やグループで研究テーマを設定し、大学や行政、専門機関などと連携したり、指導助言を受け

たりしながら、課題解決型の探究活動に挑む。情報収集、実験、観察、フィールドワークなどを行い、その結果を整理・分析し、ポスター発表やスライドプレゼンテーションを行うなど、校内外での表現活動を展開する。SDGsを核とした課題研究テーマは100近くにも及び、ジャンルも地域振興、暮らし改善、防災減災、ものづくり、国際関連、人文、数学、物理、化学、生物、情報など多岐にわたる。

そして、3年次では2年次の探究活動の集大成となる「研究集録」を作成し、探究活動を通して何を学んだのかを整理したうえで、将来何をしたいのかをまとめていく「自己探究」を行う。特徴的なのは「自己探究」の中で「志望理由書」の作成と「模擬面接」を、総合・推薦型選抜の希望者だけでなく3年生240名全員が経験していることだ。

「志望理由書が紙へのアウトプットだとすれば、模擬面接は口頭でのアウトプット。私は“英語4技能”になぞらえて“探究4技能”という言葉を使っているのですが、“読む・聞く”と同じように、“書く・話す”のアウトプット能力が探究活動には必要不可欠だと思っています。入試のことだけ考えれば、全員に行う必要はないのかもしれませんが、大学合格のためではなく、アウトプット能力は社会に出たときに必須な能力だと考え、取り組んでいます。志望理由書は2年次の後半から3年次前半期にかけて複数回書いてもらいます。志望理由書や模擬面接を通して大学へ行くモチベーションがにわかにより高まり、やる気に火が点く生徒も多いですね」

育てたい“山東生像”を念頭に置きつつ 独自の探究モデルを構築

2年次の後半という早い時期をめぐり、これまでの探究活動を「自己の在り方・生き方」に帰結させるポイントとは何か。『山東探究塾』のプログラム作成を担った教育企画課長の佐々木隆行先生は、「本校は、探究活動と進路選択の融合をめざしています。たとえば将来のことについても1年生の段階からずっと考えさせるようにしているので、2年生から実施する課題研究に取り組んでいく中で自己の理解もおおのずと深まり、具体的な進路がだんだん固まっていくという感じです」と話す。

課題研究には2つの条件を付しているという。1つは

必ず現実的課題を選び、実社会で通用する課題解決をめざして探究活動すること。もう1つは、テーマの選択は以下3つのどれかに必ず当てはまることだ。

- ①自分の進路と関係する
- ②興味・関心がある
- ③自分の適性に合っている

「3つのうちどれを選んでも必ず自分の将来につながる、キャリア教育と連動する仕組みになっています。ただし、③の適性などは実際にやってみないとわかりませんし、課題に取り組む過程で解決の視点や方法が変わるなどした場合に、テーマを修正してもよいとしています」

探究科設置に当たっては、探究先進校の視察研修を行った。先進校の取り組みには参考になる点が多々あったが、「ただ踏襲するのではなく、まず本校としてめざすべき目標を明確にする必要があると思い至りました」と佐々木先生は振り返る。育てたい“山東生像”や、地域や国際社会で求められる資質・能力について教員間で議論した結果、『ふるさとやまがたの課題に立ち向かうグローバルリーダーの育成』という目標が定まった。「めざす目標を整理した結果、文部科学省が掲げる目標と結果的に合致し、“山東生”らしい視点に基づく探究活動と、それにより培われた資質・能力を大学側が評価してくださったということだと思います」と佐々木先生は分析する。

また、教科の授業やテストでは測れない生徒の資質・能力が、探究活動や探究型学習を通じて見えてくることもあるという。

佐々木先生は、「一般選抜に向いている生徒と、総合・推薦型選抜で力を発揮できる生徒がいると思います。大学入試は多様化してきていますが、それは大学に評価してもらい資質・能力が多様化しているということだと捉えています」という。

東京大学に合格した 探究科第1期生のケース

学校推薦型選抜で東京大学に合格した探究科第1期生はどんな生徒だったのか。

工学部に進んだ生徒は温暖化解消をテーマとした。藩政時代からの歴史的遺産である山形五堰（5つの農業用水路）を流れる水を利用し、山形市のヒートアイランド現象を緩和できないかと着想。校地に隣接する山形地方

気象台にも応援要請して過去のデータを集め、計測器を開発し実測も行った。

「彼は最初からは東京大学志望ではなかったのですが、探究活動の実践やさまざまな経験をする中で、自分のやりたい研究をするためには東京大学に行くしかないと一念発起。『東京大学に絶対入りたいから学校推薦型選抜にチャレンジする』と決めてからは、学力が爆発的に伸びました」(佐々木先生)

理学部に合格した生徒は、東京大学で地球惑星環境学関連の研究をしたいと考え、同校の理数探究科のカリキュラムでは選択できない「地学」を独学で勉強。3年間の部活動(探究部理数班)で養った理系の研究力をアピールし、合格を勝ち取った。

もう1人、経済学部合格した国際探究科の生徒は、「色と記憶の関係」について数的解析を展開。独創的な数的探究の姿勢と成果が好評価につながったと推察される。

学年団・教科担任フル稼働で指導 3年次前期には全員に模擬面接を実施

山形東高校では、一般選抜に照準を合わせた「授業中心主義」が本流だ。多忙を極める教員がほとんどの中、総合・推薦型選抜を希望する生徒たちへの個別指導は、いつ頃からどのような体制で実施しているのだろうか。

棚村先生によれば、東京大学の学校推薦型選抜をめざす生徒のみ2年次3月には個別指導をスタートし、それ以外の大学の総合・推薦型選抜希望者に対しては、3年次の前期から指導を開始するという。

「総合・推薦型選抜の場合、かなりの準備が必要になるので、生徒には『チャレンジしたい人は保護者とよく話し合っ、遅くとも2年次の3月までに申し出なさい』と伝えています。特に東京大学・京都大学の場合、早めに申し出るように伝えていますが、それは教科学力向上の妨げにならないことが目的であり、総合・推薦型選抜に向けた準備は勉強の合間に行うよう指導しています」

東京大学は1校からの推薦人数が合計4名まで(うち男女は各3名まで)の制限があるが、希望を募った時点で人数がオーバーしていても、そのまま指導を行う。指導を進める中で希望を取り下げる生徒もいるため、出願のころには募集枠に収まる程度の人数になるそうだ。

総合・推薦型選抜希望者への指導については、全体指

導を行う部分と個別に対応する部分に分けて行っているという。

「本校では、総合・推薦型選抜を希望するかに関わらず、3年生全員に『志望理由書』の作成と『模擬面接』を行うこととしていますが、結果的に総合・推薦型選抜希望者への個別指導時の負担軽減につながっていると思います。個別指導は3年次担任団11名のほか教科担当者も担当し、特に理科・地歴公民科教員はフル稼働で指導に当たります。小論文は3年次の4月頃から希望者を集めて特別講習を集団で行い、回し読みや批評をし合うなど、集団での学びも取り入れています。面接については、東京大学も含め一次選考通過者のみに指導します。出願書類の準備をする中で思考が整理されているので、短い期間でも十分対応できています」(棚村先生)

出願書類などの個別指導は、ゼロから行うわけではない。それ以前から1・2年次も各自の探究活動と進路を結びつけて考える習慣を養いつつ、課題研究の活動内容を随時ワークシートに書き込みポートフォリオ化している。さらに3年次の「自己探究」で自身の考えをまとめている。そういった一連の経験が出願書類を準備する際の下地となり、訓練にもなっているのだ。

今後さらに総合・推薦型選抜の志望者が増えたときに、学校としてどう対応していくか、そのための組織作りは模索中だというのが、「1・2年次の探究活動を通じて、生徒自らが動けるように育てていくことが大事だと思います。総合・推薦型選抜の個別指導をする際も、教員から締切を設けて課題を課すことはあまりしていません。総合・推薦型選抜も探究活動も究極は『自立した学習者』を育てるということではないでしょうか」(棚村先生)と、自己実現に向けて学び続ける生徒を育てていきたいと抱負を語ってくれた。

山形県立山形東高等学校

◇所在地：山形県山形市緑町1丁目5-87

◇創立：1884(明治17)年

◇卒業生数：2022年3月卒業生236名

◇卒業生の進路：国公立大124名／私立大48名／専門学校1名／その他63名

キャリア教育の伝統校が展開する 生徒の資質・能力を育て、引き出す進路指導

福岡県立城南高等学校

Point

- ✓ 「第一志望」を貫かせることに重きを置いた進路指導
- ✓ 年次ごとに進路意識を高める多様なイベントを実施
- ✓ 本気の志望動機を「引き出す」全校体制の個別指導



進路統括
下田浩一 先生

九州大学の総合型選抜では 全国トップの合格者数を誇る

福岡県立城南高校は、九州大学をはじめとした国公立大学に毎年200名前後が進学する進学校だ。国公立大学進学者のうち、20～30名ほどは総合・推薦型選抜によるものである。進路統括・下田浩一先生によれば、成果につながったカギは、時代のニーズに合わせて進化・発展させながら、30年近く継続してきた進路学習プログラム『ドリカムプラン』にあるという。

城南高校は、1995年度から全国に先駆けてキャリア教育に取り組み、その後、「高大接続」に関する文部科学省の研究指定を受け、日本屈指のキャリア教育先進校として知られるようになった。『ドリカムプラン』は、高校3年間で自分の夢を実現するためにあると位置づけ、自己理解・自己啓発・自己実現をめざす活動である。2015年度に第2期SSH指定校となったのを機に課題研究へとシフトチェンジしているが、1年次の段階から校外活動を奨励し、好奇心を強めていくような機会を与えているという。

「福岡県や社団法人などのインターンシップに参加するなど、校外活動に勤しむ生徒はかなり多いと思います。たとえば、NPO法人が管理運営している水族館に小学生の頃から通い詰めていた本校生が館長を務め、新聞等でも紹介されました。総合・推薦型選抜に向けた個別指導は3年次から始まりますが、1・2年次の生徒各人の校内外活動への意欲や熱意、成果などを担任・副担任が見極めながら、これぞと思う生徒には、総合・推薦型選抜

にチャレンジしてみたらどうかと勧めています」

城南高校では、例年1学年400名のうち40名ほどが総合・推薦型選抜を希望する。このうち一般選抜を含め100名近くが出願する九州大学では総合・推薦型選抜にチャレンジする生徒は30名前後と最も多く、2022年度は8名の合格者を出した。

躍進の背景には、徹底した「第一志望重視」の進路指導の基本方針と、第一志望を諦めない生徒の気持ちを鼓舞するための、さまざまな仕掛けがある。

「1年次から定期的に行っている志望校調査で書かせるのは第一志望のみ。第一志望がダメなら浪人してもいい、そのくらいの覚悟で頑張れと生徒を激励しています。確固たる第一志望を見つけるために、進路選択に関連するさまざまな行事を実施しているのも本校の特徴です」

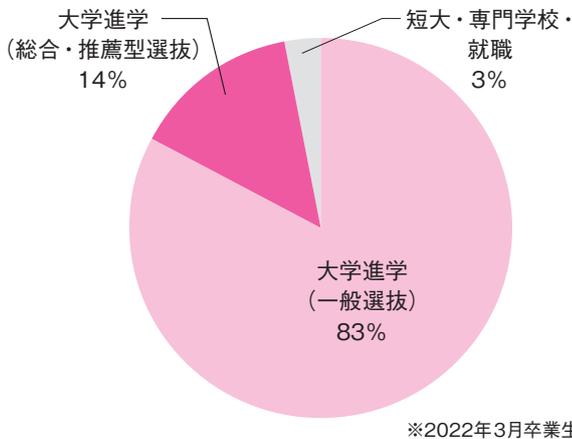
進路意識を高める『ドリカムプラン』は 出前講座あり、移動オープンキャンパスあり

課題研究のテキストでもあり城南ドリカムプランの手引き書でもある『ドリカムBOOK』に記載されている進路実現のための3年間のステップを見ていこう。

1年次のポイント

- クリエイター体験講座、地域探究活動などを通じて探究スキルを学ぶ。
- 大学の調査・研究
大学に関する情報を集める方法を知り、自分のめざす大学や学部・学科を明確にする。

図表1 進路決定者(309名)の内訳



図表2 3年間の主な進路指導の流れ

学年	時期	指導内容
高1	6月頃	文理選択
	8月頃	九大生 ホーム・カミング・デー 長崎大学移動オープンキャンパスレポート
高2	8月頃	高大ジョイントセミナー オープンキャンパスレポート
	1～2月頃	志望理由書作成 (学年全員)
高3	6月頃	総合・推薦型選抜希望者向け説明会
	9月頃	個別指導開始

● 九大生ホーム・カミング・デー (8月)

城南高校卒業の九州大生との交流を通し、学びの内容や学生生活を知ること、大学の魅力に触れるとともに進学意欲を高める。九州大学をめざす全学年の生徒を対象に実施。

● 長崎大学 移動オープンキャンパスレポート (8月)

城南高校を会場とする長崎大学主催の県外オープンキャンパス。長崎大学の全学部が城南高校にやって来て、興味のある学部・学科について直接大学の教員や大学生から話が聞ける絶好の機会。特に興味・関心の高い学部・学科についてレポートにまとめる。

2年次のポイント

● 身近な疑問から課題を設定し、班ごとに探究活動(課題研究)を行う。

● 高大ジョイントセミナー (8月)

国立大学を中心に大学関係者の協力のもと、大学教員などによる学問入門講座(出前講座)を開講し、主体的な進路選択の一助とする。各自の進路希望・興味を踏まえて事前学習を行う。高大ジョイントセミナーを通して学んだ内容、気づいたことなどをレポートにまとめる。3年次にも実施。

「ちなみに本年度は九州大学のほぼすべての学部の先生が講座を開いてくれました。九州大学志望者が多い本校ですから、生徒の反響もとりわけ大きかったです」

● オープンキャンパスレポート (8月)

自分が第一志望とする大学のオープンキャンパスに参加。大学・学部・学科の特色、実際に行ってみて感じた

ことや印象、参加企画・イベント内容、講演内容、全体の感想などをレポートにまとめる。3年次に行く生徒もいる。

● 志望理由書の作成 (1～2月)

3年次のポイント

● 研究成果の発表

● 総合・推薦型選抜希望者向け説明会 (6月)

● 個別指導の開始 (9月)

「2年次の冬には、学年全員が志望理由書の作成を行います。また、3年次6月の説明会には関心を持つ生徒が100名ほど参加しますが、厳しい面も伝えたいので、『それでもチャレンジしたい』という覚悟を持った生徒40名ほどがエントリーしてきます」

また、志望理由書を作成する際には、独自のワークシートを用いて深く考えられるようになっている<図表3>。その大学を志望するきっかけとなった出来事だけでなく、幼少期までさかのぼり、当時の自分の様子やその大学を志望することに関連しそうな出来事、そのとき感じた気持ち等を掘り起こしてまとめたり、めざす職業や将来やりたいこととの関連を考えたりしながら、「なぜその大学に行きたいのか」について多角的に考える。その上で、「その大学・学部・学科が求める学生像とどの程度一致するのか」や、「他の者にはないアピールポイント」を意識しながら志望理由書を作成していく。

図表3 志望理由書作成時のワークシート

なぜそこに行きたいのか

1年生の頃から、「進路希望調査」をとってききましたし、校外模試等でも志望校について書く欄がありました。しかし、「●●大学○○学科」等の志望先を書くことはあっても、「なぜそこに行きたいのか」を書く機会はなかなか持っていないのではないのでしょうか。最高学年となり、自分の進路実現について、より具体的に考える時期となった今、改めて「なぜその進路をとろうとしているのか」について見つめ直してみましょう。これは、後の「志望理由書」を書く際の大きな材料にもなります。

現在の進路志望 (大学・学部・学科名 等)

なぜならば

めざす職業

今後やりたいこと

関連する出来事やそのときの気持ち・考えたこと等をできるだけ挙げてみよう

きっかけになった出来事	そのときの気持ち・考えたこと
幼少期の様子・出来事	そのときの気持ち・考えたこと
小中学校の様子・出来事	そのときの気持ち・考えたこと
高校での様子・出来事	そのときの気持ち・考えたこと

進路指導部が担当教員を割り振り 全校体制で個別指導に取り組む

個別指導がスタートするのは3年次の9月だが、どのような体制で指導に当たっているのだろうか。

「3年生の担任・副担任が個別指導の中心にいて、小論文・面接の指導は学年を超えて各教科の先生に協力要請するなど、進路指導部が割り振りをしながら進めます。小論文指導は国語の先生だけに頼るのは負担が大きすぎますし、そもそも小論文は国語力だけで勝負するものではありません。書くテーマによって地歴・理科の先生が指導することもあれば、家庭科の先生にお願いすることもあります。ガチッと組織化された指導体制ではありませんが、ドリカムプランという伝統を踏まえ、学校全体

で臨機応変に協力しあう体制ができています」

面接の指導は、基本的に担任・副担任が行うが、授業や部活動でお世話になった先生に生徒自身が依頼したり、普段接する機会の少ない先生をあえて選んで指導をもらうケースもある。

総合・推薦型選抜の指導において、下田先生が最も重視し、強化したいと考えるのが志望理由書の指導だ。

「志望理由書の指導も基本的には担任・副担任が行います。何度も書き直しをしていますが、私のところへ持ってくる生徒もいます。私の場合は、こう書けばもっとよくなるよという言い方はせず、生徒の“引き出し”を開けることに徹しています。『なぜこの分野に興味を持ったのか?』『最もやりがいを感じたのはどこか?』そういった質問をひたすら重ねながら、生徒自身に改善点を気づかせるという手法です。これは小論文や面接にも言えることですが、本校では1・2年次に実施するさまざまな行事ごとにリフレクションシートを書き、それをストックしているの、生徒はすでに十分な材料を持っています。経験という“引き出し”の中に保管した材料をいかに

引っ張り出し、整理して表現させることができるか、そこがポイントだと思います」

生徒の志望する学問領域の知識がないと、個別指導で適切なアドバイスやサジェスチョンができないと考える教員も少なくないと思うが、生徒から材料を引き出して自ら考えさせる下田先生のコーチング法は、面接や志望理由書の指導に当たる際の1つのヒントになりそうだ。

総合・推薦型選抜で求められる 資質・能力を培う生徒主体の校外活動

城南高校の場合、総合・推薦型選抜で合格を勝ち取った生徒は、どのような課題研究や校外活動に取り組んでいたのだろうか。過去の具体的な事例を紹介してもらった。

◆Aさんのケース／総合型選抜で九州大学工学部Ⅱ群・材料工学科に合格

小さい頃から理数に対する関心が高く、中学時代は数学教師を質問攻めにするほどだった。城南高校に入学後、学年が進行するに従い、ますます理数教科への興味や探究心が高まり、教科書レベル以上の内容まで学習が進んだ。1年生のときから3年間、九州大学未来創生科学者育成プロジェクトに参加したことがきっかけで、超伝導体に魅了され、「超伝導体の完全反磁性に及ぼす磁場遮蔽の効果」と題する研究を行う。同プロジェクトで出会った大学教授の下で研究を深めたい一心で、九州大学の総合型選抜でその道に進んだ。高校在籍中に学校外の研究発表会において受賞歴多数。

◆Bさんのケース／総合型選抜で九州大学農学部に合格

城南高校では生物部に所属し、「異なるバイオームから得られた菌類の温度と増殖の関係」をテーマに研究。さらに、課題研究では「身近な水は生活用水として利用可能か」と題する研究を進めた。2年生のとき「うみつなぎふくおか」（九州大学大学院工学研究院附属環境工学研究教育センター主催）の活動に出会い、海洋ごみ問題やその処理方法について学んだ。当初は他の大学の農学部を志望していたが、この活動によって九州大学農学部をめざすようになった。大学生になった今も「うみつなぎ」の活動は継続している。

九州大学の総合・推薦型選抜は、多くの国公立大学と同様に、一部を除くほとんどの学部で共通テストを課している。いわば基礎学力を担保しての評価となる。しかし、大学によっては例外もあるようだ。昨年度、防衛大学校の総合型選抜に合格した生徒がそのケースだ。

「運動部に所属する生徒で、人間的魅力は申し分ないけれど、評定値的には厳しいものがありました。『この成績だと厳しいだろうから出願を取り下げさせてはどうか』と担任に言いましたが、『本人がどうしてもこの大学に行きたがっているので挑戦させます』と。その結果、大学から『ぜひ入学してほしい。本学ではこういう人こそ総合型選抜で取りたいんだ』という評価をいただき、見事合格したのです。これは特殊な例かもしれませんが、総合・推薦型選抜で大学側が求めているのは、学力や知識だけではなく、絶対にこの大学に行って活躍したいと

いう、明確な目的意識を持った意欲ある人材なのだ」と、思いを新たにしました。ただ、学力では測れない資質・能力というものは本当に十人十色なので、そこが個別指導の難しい部分です。その点で、ジェネリックスキルを測定する『学びみらいPASS』にも注目しています。これまで教員の肌感覚でなんとなく捉えていた生徒の資質・能力を、今後はより客観的につかんでいく必要性を感じています」

総合・推薦型選抜の存在感が高まる昨今、その入試対策に特化した学習塾なども増えつつあるが、そうした風潮に対して下田先生は疑問を呈する。

「単に総合・推薦型選抜に合格するためのスキルを身につけさせるだけの指導は、本末転倒のような気がします。大前提として、高校3年間は自分が将来何をしたいのか、自己の夢を見つけるための時期であり、大学もまた夢の実現の途中経過としてあるのではないのでしょうか。先ほど紹介した事例も含めて常に思うことですが、積極的に学校の外に出て活動した生徒は、そこで得た知的な刺激や体験によって見違えるほど成長し、志が高まっていくように思います。そんな志の受け皿の1つが総合・推薦型選抜なのではないでしょうか」

城南高校の総合・推薦型選抜の実績はなぜ伸びているのか？ その理由に思いを巡らせるとき、上記の下田先生の言葉は示唆に富んでいる。およそ30年に及ぶキャリア教育の歴史をバックボーンに、校外活動を奨励しながら自分の進路に自覚的な生徒を育て、夢の実現に向けて第一志望を貫かせる。そんな同校に根づいている教育姿勢や取り組みが、総合・推薦型選抜で求められている資質・能力と親和性が高く、結果的に近年の実績に結びついているのだろう。

福岡県立城南高等学校

◇所在地：福岡県福岡市城南区茶山6-21-1

◇創立：1964（昭和39）年

◇卒業生数：2022年3月卒業生384名

◇卒業生の進路：国公立大138名／私立大161名／専門学校10名／その他75名

教員の本気の指導に生徒も本気で応える 出願指導に「学びみらいPASS」の結果も活用

岐阜県立加納高等学校

Point

- ✓ 「学びみらいPASS」も活用し小論文や面接への適性を判断
- ✓ 小論文・面接指導は、学年や教科の枠を超え、全校体制で取り組む
- ✓ 教員は生徒の希望の実現に向けて全力を尽くし、生徒には本気の覚悟を求める



進路指導主事
藤田英博 先生

一般選抜を基本とするが

総合・推薦型選抜の希望者にも対応

岐阜県立加納高校は、例年国公立大学合格者数が140名を超える進学校だ。進学者の約9割は一般選抜の合格者で占められているが、名古屋大学や岐阜大学などの地元国公立大学の学校推薦型選抜にも毎年合格者を輩出している。

進路指導主事の藤田英博先生は、「本校は、一般選抜に向けて頑張るということを基本としています。総合・推薦型選抜について、こちらから生徒に出願を促すことはしていません」と話す。学校としては生徒の希望があった場合、総合・推薦型選抜の指導にも対応しているという。その根底には、「生徒には日々の学習を通じて培った力を生かして進学してほしい」という願いがある。近年は国公立大学の学校推薦型選抜の合格者数も増えてはいるが、「結果として増えてはいますが、本校としてそれをめざしているわけではありません。どちらかといえば、一般選抜でも合格できる力を持った生徒が学校推薦型選抜に出願して合格しているという認識です」という。

ここ数年、全国の大学で総合・推薦型選抜の募集人員は増加傾向にある。しかし、加納高校の生徒に志望者の多い大学ではあまり変化がなく、総合・推薦型選抜の合格者数が増えるというような状況にはないようだ。むしろ、こうした全国的な傾向を背景に、安易な気持ちで総合・推薦型選抜を希望する生徒が増えつつあり、軽い気

持ちで志望しないよう繰り返し伝えていているというのが実情だ。

ただ、総合・推薦型選抜を希望する生徒への指導も、一般選抜と同様に着実に行われており、後述するように「学びみらいPASS」も活用して生徒の自己実現を後押ししている。

目標設定を急がせず

生徒の伸びしろに期待する

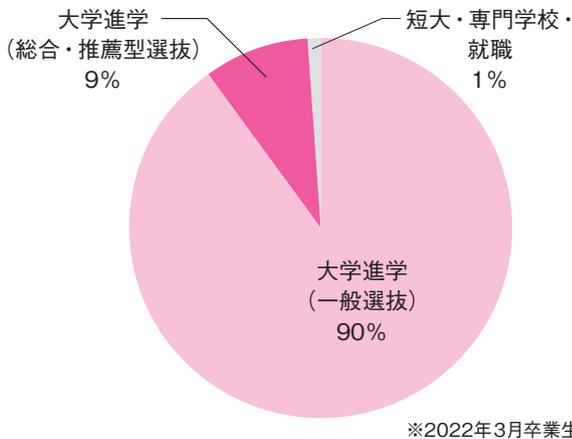
加納高校の3年間の進路指導のキーワードは「行ける大学ではなく、行きたい大学をめざす」であり、教科学力の向上を一番の目標に据えている。1年次の前期に文理選択を行い、2年次にはさらに具体的に進路を絞り込む。ただ、実際には絞り込めない生徒も少なくない。その場合、大まかに自分の進路や行きたい大学を考える程度でも良いとしている。「早期に目標が定まることは良いことですが、なかなか志望大学を選べない生徒もいるので、“走りながら考えよう”と伝えていきます。志望校が決まっていなくても、やるべきことにはきちんと取り組むことができるタフな受験生になるように指導しています」と話す。志望校決定を急かさないのは、生徒の成長の可能性を最大限引き出すための工夫だという。

生徒の本気度を鑑み

小論文等の指導は3年次の10月から

加納高校の総合・推薦型選抜の指導スケジュールは<図表2>のとおりだが、指定校推薦枠のある大学は3年

図表1 進路決定者(316名)の内訳



次の9月初旬に生徒に示している。また、岐阜県の多くの公立高校は2期制のため、9月の終わりに前期末試験があるが、9月初旬に公示するのは、期末試験への取り組みの励みとしての意味もある。「指定校推薦を希望する生徒は、頑張って勉強するよとのメッセージでもあります」と話す。ただ、前述のように、生徒に対し指定校推薦を勧めるような働きかけは一切行わない。そのため、指定校推薦枠が使われない大学もある。「本校の場合、指定校推薦の条件をクリアする生徒にとっては、一般選抜で受験しても合格できる大学が大半なため、見極めが難しいです」と進学校ならではの課題もあるようだ。

また、志望理由書や小論文・面接指導は3年次の10月から行っている。高校によっては、もっと早期から取り組むところもあるが、この点について藤田先生は「生徒本人が本気モードになっていることが大切です」という。

加納高校も以前は2年生で志望理由書を書く指導を行っていた。しかし、本人が受験に対して真剣な気持ちになっていないと何を練習してもなかなか身につかないということがあり、3年次の秋からの指導にしたという。

図表3 教員アンケート

3年生入試対策個別指導 担当希望調査

1 下記から希望の方式を選択してください。
 (ア) 小論文・面接 (イ) 実技

2 (ア)～(サ)の中から、希望の分野を2つ以上選択してください。ただし、1で(イ)を選択した場合は1つで構いません。
 (ア) 保健・看護 (イ) 医・薬 (ウ) 情報・数学 (エ) 理・工・農 (オ) 人文 (カ) 法・経・社会
 (キ) 教育 (ク) 外国語・国際 (ケ) 生活科学・福祉 (コ) 体育 (サ) 芸術

図表2 3年間の主な進路指導の流れ

学年	時期	指導内容
高1	6月頃	文理選択
高2	10月下旬	学びみらいPASS (PROG-H) 受験
高3	7月中旬	(希望する生徒のみ) 小論文模試受験
		教員アンケート実施
	8月末	希望する進路の決定
	9月初旬	指定校推薦の対象大学公示
10月頃	出願校検討会議	
	進路指導部が推薦指導を希望する生徒の担当教員を決定	
	志望理由書・小論文・面接指導開始	

「タイミングがとても大切です。早過ぎてもいけませんし、遅過ぎてもいけません」と生徒の本気度合いと指導開始時期の関係が大事だという。

なお、小論文模試は夏休み前に設定している。これには総合・推薦型選抜希望者に対し、夏休み前から少しずつ準備を始めるよというメッセージとしての意味合いがある。

こうしたプロセスを経て期末試験が終わり、生徒は自分の内申点もわかり、出願基準をクリアしているかなどもわかってくる。そこで本当に総合・推薦型選抜に挑むかどうかを自分で判断することになる。

**小論文は学年や教科を超え
全校体制で指導**

総合・推薦型選抜の指導体制づくりには悩まれる高校が多いが、加納高校の場合、学年や教科の枠を超えた全校体制で指導を行っている。毎年、進路指導部が教員にアンケートを行い、担当希望の分野などを調査する<図表3>。その結果をもとに、なるべく教員の負担が偏ら

ないよう進路指導部が配分しつつ、生徒の志望先と教員の担当希望のマッチングを行う形で配置が進められている。指導を希望する生徒は個別指導申込用紙<図表4>を担任へ提出し、後日担当教員が決定したら、自ら担当教員へ相談に行くようにさせている。

学年や教科の枠も超えて指導をお願いしているため、当然、指導を受ける担当教員の学年が異なる場合もあるそうだ。「3年生の先生方だけでは対応しきれないため、他学年の先生に指導をお願いすることもあります。教員全員で3年生を応援するという意識で協力してもらっています」と全校体制で臨んでいる。このあたりは、総合・推薦型選抜を積極的には勧めないものの、ひとたび出願希望者が出た以上は、責任を持って指導に取り組むという学校の姿勢の現れといえるだろう。

総合・推薦型選抜の指導上の課題の1つは生徒の本気

度だ。学年も教科も超えて、3年生の指導に当たる体制を取っても、中には安易に総合・推薦型選抜を希望し、取り組む姿勢が甘いケースもある。「生徒には行きたい大学をめざすように指導していますから、生徒が行きたい大学があるというなら応援しないわけにはいきません。総合・推薦型選抜を受けたいと言った以上、教員は全力を尽くして指導します。生徒は、それに応えられるよう本気で取り組んでほしいと思います。しかし、まれに“もしかしたら合格できるかもしれない”という軽い気持ちで臨む生徒がいます」と指導に苦慮するケースもあるそうだ。

また、総合型選抜は出願のための書類も多く、準備を含めて指導負担が重いという。「難関大学が志願者に対して高いレベルを求めてくるのはよく理解できます。そのため、出願する以前からある程度の指導が必要になりますし、本人にも準備をさせておく必要がありますが、本校の場合は一般選抜をベースとしていることもあり、なかなか突破するのは難しいですね」と総合型選抜ならではの課題を挙げる。

図表4 面接・小論文 個別指導申込用紙

面接・小論文個別指導申し込み用紙(年内受験者)

面接 ・ 小論文 (必要なものに○をつける)

組	番	氏名
受験校	大学	学部 学科 コース
入試形態	指定校 ・ 学校推薦型選抜 ・ 総合型選抜 ・ その他 ()	
入試日	月 日 ()	
選考方法と配点	面接	点
	小論文	点
	書類	点
	学科試験 ()	点
	計	点

*今回は年内受験者のみの提出です。

*丁寧に記入して、●月●日(●) 帰りのSHRまでに担任の先生に提出。

*詳細が分からない場合は担任の先生に聞いてください。そのうえで、分かる範囲で記入してください

○あなたの担当は () 先生 () 室) です。

○この用紙と過去問題等を持って、本日中に担当の先生にあいさつに行き、今後の指導の進め方について相談してください。

「学びみらいPASS」の結果をプラスに活用

加納高校は、現在、2年次秋に実施している「学びみらいPASS」(以下、MMP)のPROG-H^(注)のスコアを総合・推薦型選抜の指導の一部に活用している。模擬試験の結果では測ることができない、面接や小論文への適性を見る参考値としてPROG-Hのリテラシー、コンピテンシーのスコアを参考にしているのだ。

ただし、リテラシーとコンピテンシーのスコアが高いから総合・推薦型選抜に向いている、スコアが低いから出願を勧めないといった使い方はしていない。総合・推薦型選抜を希望するという生徒の意思を第一にしつつ、スコアが高い生徒には自信を持って臨むよう背中を押し、スコアが低い生徒に対しては、不足している部分があるが本当に頑張れるかと覚悟を促すような声掛けをしている。スコアはそうした確認のために活用しており、

(注) MMPのPROG-Hでは、学校や社会で求められる「ジェネリックスキル」を測定できる。リテラシー(知識を活用して課題を解決する力)は7段階(総合)、コンピテンシー(経験から身につく行動特性)は5段階で得点化している。

図表5 総合・推薦型選抜の入試結果とMMP (PROG-H) のスコア (イメージ)

区分	大学	学部	学科	方式	リテラシー	コンピテンシー	合計	合否
国立	A大学	●●学部	▲▲学科	学校推薦型選抜	7	4	11	合格
国立	B大学	○○学部	△△学科	学校推薦型選抜	6	4	10	不合格
私立	C大学	◎◎学部	※※学科	総合型選抜	3	3	6	合格

教員にも生徒にもプラスに働くように使っている。「マイナスを指摘することは簡単です。しかし、入試の直前にそれを言っても生徒のためになりません。多少、合格が厳しい状況の生徒であっても熱心に励まします」と話す。

実際に共通テストを課す学校推薦型選抜で、共通テストで思うような得点が取れなかったものの、リテラシー、コンピテンシーの数値が高かった生徒が合格できた事例もあり、出願を迷うようなケースにおける参考資料になるそうだ。

加納高校では、総合・推薦型選抜を受験した生徒の入試結果とリテラシー、コンピテンシーのデータを紐づけて毎年集計している<図表5>。データを積み重ね、受験者が多い大学の総合・推薦型選抜において合格に必要なおおよそのスコア水準を把握している。ただ、「スコアはあくまで参考値にすぎません。リテラシー、コンピテンシーが高いだけで合格するわけではなく、学力も伴わないと厳しいです。思いを自分の言葉で伝えるには、適切な表現力・語彙力が必要になります」と、総合・推薦型選抜においても学力は重要であると強調する。

**指導の負担は重い
生徒の頑張りに救われる思い**

総合・推薦型選抜は、一般選抜とは異なる対策が必要となるため、生徒・教員ともに負担が重い。それでいて必ずしも合格しやすいわけではない。さらに、各高校がそれぞれ独自の指導で努力しているため、藤田先生は年々合格のハードルが上がっていると感じている。そのため、生徒には負担の重い総合・推薦型選抜ではなく一般選抜を勧めたくなるときもある。「特に難関大学の総合・推薦型選抜にチャレンジした結果、不合格となった生徒がいた場合には、本人の落ち込んでいる姿を見ると、チャレンジさせたことが受験勉強の足かせになったのではないか、やはり一般選抜のみで受験した方が良かった

のではないかという思いがよぎることもあります」という。

もちろん、総合・推薦型選抜で不合格となっても、一般選抜にチャレンジすることも可能だ。そうはいつても、総合・推薦型選抜で不合格になってしまった場合、短い期間で気持ちを切り替え、一般選抜に向かっていくには相当の努力と精神力が要求されることは想像に難くない。しかし、「総合・推薦型選抜に本気で取り組んだからこそ、次の入試への推進力になり、一般選抜で合格できた」と、合格体験記を書ってくれた生徒もいるそうだ。藤田先生は「生徒たちは本当に強くてタフだと思いました。生徒なりに自分の足りなかった部分に気づき、悔しかった思いを昇華させたのだと思います。生徒たちの頑張りに救われた思いです」と語る。また、「何のために大学に行くのか深く考えたことがなかったが、志望理由書の指導を受ける中で、大学に行く意味がわかった」と合格体験記に書いてくれた生徒もいるという。総合・推薦型選抜への挑戦という経験を経て、進路実現への思いが鮮明になったということだろう。

藤田先生は「大学受験を通じ、自分の人生を豊かにするための力をつけてほしい。そのためには、やはり全力で取り組むことがポイントではないかと思います。教員は、生徒がチャレンジしたいというのであれば全力で後押しします。指導は大変ですが、それに応えてくれる生徒がいるからこそ、教員も頑張れます」と語ってくれた。

岐阜県立加納高等学校

◇所在地：岐阜県岐阜市加納南陽町3丁目17番地

◇創立：1916(大正5)年

◇卒業生数：2022年3月卒業生374名

◇卒業生の進路：国公立大132名／私立大179名／短大2名／専門学校3名／その他58名

全校体制でさまざまな場所で行われる指導により 学校全体で国公立大学の総合・推薦型選抜に向かう

岐阜県立長良高等学校

Point

- ✓ 5年前から国公立大学の総合型・学校推薦型選抜を積極的に活用する方針に
- ✓ 「チーム長良」として、管理職を含め学校全体で生徒を支援
- ✓ 部活動の先輩や教師誰にでも相談できるなど、人のつながりが強み



進路指導主事
富田充弘 先生

部活動や英語教育に力を入れ

国公立大学の総合・推薦型選抜で合格者を多数輩出

岐阜県立長良高校は、中京圏を中心とする大学に多くの生徒が進学する普通科高校である。「開拓者の気魄で勉学とスポーツにあたれ 礼儀正しくあれ」を校訓として掲げ、9割近くの生徒が部活動に加入し3年間やり遂げるなど、文武両道を実践している。また、近年ではグローバル社会で活躍できる力の育成をめざし、外部の英語資格・検定試験を積極的に活用するなど、英語教育にも力を入れている。

国公立大学の進学実績を見ると、近年は特に総合・推薦型選抜での合格者を多く輩出し、着実に進学実績を伸ばしている。2022年度入試の国公立大学合格者113名のうち、49名が総合・推薦型選抜による進学者だ（既卒生を除く）。

進路指導主事の富田充弘先生は、「国公立大学の総合・推薦型選抜を突破するためには、部活動や何かのコンテストで好成績を残すなど、華やかな実績や経験がないと難しいというイメージがあるかもしれませんが、もちろん部活動の実績自体が素晴らしい生徒も多くいますが、3年間継続して部活動をしていく中で、身につけたものをアピールし合格につながっている場合が多いと考えています。教師が指導をする際も、実績そのものだけではなく、活動を通して何を得られたのかを自分の言葉で話せることが大事だと伝えていきます」と指導のポイントを語る。

近隣の国公立大学に交渉し

学校独自の大学訪問イベントを立案

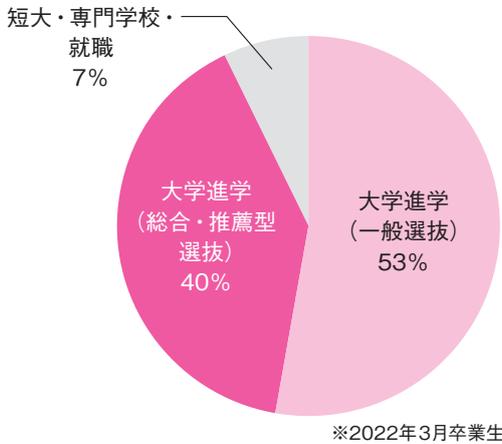
3年間の進路指導の流れを見ていこう<図表2>。ここ数年は新型コロナウイルス流行のため実施できなかったり、オンラインに変更したものもあるそうだが、例年は、1年次の9～10月頃、1日かけて岐阜大学の見学会を行っているという。

また、2年次の7月頃には、学年全員を対象に愛知教育大学教育学部、名古屋市立大学看護学部、三重大学生物資源学部や教育学部、人文学部など10前後の大学・学部から生徒が選ぶ形で近隣の国公立大学の見学を実施している。さらに理系の女子生徒向けには、岐阜大学の研究室見学会も実施している。

「一番身近な大学ということもあり、入学時は岐阜大学を志望する生徒が多いのですが、1年次はどんな学部・学科があるかを理解していない場合があるため、見学会を実施しています。2年次には、学部系統別の選択肢を生徒に提示し、その中から見学先の希望を取ることで、その前に自分の学びたい学問をしっかりと考えることにつながっています」

2年次の学部・学科別の大学見学については、進路指導部が候補を選定し、大学に個別に交渉、日程調整の上実施している。オープンキャンパスなど大学を知る機会がある中で、高校独自の見学会を実施する理由は何か。「大学のオープンキャンパスへの参加とそのレポートを夏休みの課題としたことありますが、部活動が活発な本校では、夏休みの土日開催のオープンキャンパスに参

図表1 進路決定者(348名)の内訳



図表2 3年間の主な進路指導の流れ

学年	時期	指導内容
高1	6月頃	文理選択
	9~10月頃	岐阜大学見学会
高2	7月頃	近隣の国公立大学見学会
		(理系女子生徒のみ) 岐阜大学研究室見学会
高3	5月頃	生徒向け 進路講演会
	6月頃	保護者向け 進路講演会
	7月頃	小論文 外部講師指導 (全員)
	9月頃	保護者向け 進路講演会
		面接 外部講師指導 (全員)
	10月初旬	国公立大学の総合・推薦型選抜希望者調査、校内選考、個別指導開始

加できない生徒が多く、高校が個別に大学訪問の機会を設定しています。場合によっては、学生が講義を受けている様子を見学させていただけることもあります。交渉は大変ですが、実際に大学を見に行くことでイメージが湧きやすく、志望校の選択もしやすくなると考えています」

大学選びのポイントや入試動向などに関する進路講演会も、保護者向け、生徒向けそれぞれ実施している。保護者向けには3年次の6月と9月の2回、生徒向けには3年次の5月に実施している。

ほかにも、1・2年次については、岐阜県の「グローバル探究実践事業(注)」の一環として、「総合的な探究の時間」の取り組みの中で行う岐阜大学と連携した活動も、生徒が進路を考える機会になっているという。

3年次に外部講師を招き

小論文・面接の一斉指導を行う

続いて国公立大学の総合・推薦型選抜を希望する生徒への指導の流れを見ていこう。1・2年生には、毎月発行している進路だよりの中で、国公立大学の総合・推薦型選抜で合格した大学・学部・学科、共通テストの有無など選抜方式まで詳しく掲載することで、早くから情報提供を行っている。3年生保護者説明会では、進路だよりを数年分抜粋して総合・推薦型選抜を含めた合格状況を情報提供している。

また、今年度は岐阜県の進学指導重点校事業の指定校となったこともあり、外部講師を招き、3年次7月に小

論文、9月に面接の一斉指導を行った。そして9月の学年集会で総合・推薦型選抜について説明し、10月初旬に希望者の調査および校内選考を経て、個別指導を始めた。

「学年集会では、国公立大学の総合・推薦型選抜の倍率などを伝え、簡単には受からないことや、1校からの出願人数に制限があり、校内選考を行う場合があることなど、厳しい面も伝えていきます。また、学年集会だけでは情報は伝えきれませんが、進路だよりのほか、部活動の先輩が合格したという話も直接生徒は聞いているので、学年集会をする頃には生徒の希望はおおよそ決まっています」という。

低学年の段階から大学見学や入試の情報提供を行い、3年次に小論文・面接の一斉指導を行うなどの仕掛けがあるからこそ、短い期間に集中した個別指導で合格へと導くことができるのだろう。

5年前から「長良スタイル」として

国公立大学の総合・推薦型選抜を積極的に活用

長良高校では、国公立大学の総合・推薦型選抜を希望する生徒は例年80名程度にのぼる。2022年度の3年生は高校入学直後からコロナ禍で部活動を含めた課外活動が制限されたり、英語資格・検定試験も受験できないなどの理由により、希望者は少ないものの、ここ5年ほどは80名前後で安定しているという。

しかし、かつては年度によっては一般選抜中心の指導であり、国公立大学の総合・推薦型選抜を希望する生徒の少ない年もあったという。どのような背景があり、今

(注) 国内外の教育機関や専門性が高い機関、さらに、国際的な企業や地域の関係者など、幅広い外部機関・関係者と連携し、より高度な知見・専門性に基づいて、教科横断的・探究的な学習を実施し、「ふるさと教育」を推進する岐阜県の事業。

のような人数になったのだろうか。

「本校の生徒は、部活動や実用英語技能検定の取得に熱心に取り組んでおり、これをさらにアピールできないかと考えました。また、国公立大学は前期・中期・後期試験と最大3回しか受験の機会がありませんが、総合・推薦型選抜を受ければ、もう1回受験のチャンスを増やすことができるため、条件に合う場合は積極的にチャレンジしていこうという話になりました」と富田先生は振り返る。前々任の学校長がそういった方針を打ち出し、『長良スタイル』と名づけたという。

図表3 卒業生の声 (一部抜粋)

進路研究の大切さ	英語小論文と面接の対策
<p>私が進路実現において大切だと感じたものは3つあります。1つめは、進路研究です。私は、志望大学の特別入試に挑戦しました。聞き慣れない入試方式かと思えます。この入試方式は、「進路だより」を通して知りました。進路を決定するきっかけは、思わぬところに落ちています。自分の興味のある分野についてだけでも、アンテナを張っておくといいと思います。また、先生に相談をしたり、入試日程を調べたりということは、受験生になる前からやっておいてよかったと思っています。・・・所属している部活動や学力に関わらず、進路研究は誰でも気軽に出来ると思います。授業時間として設けてある進路学習の時間をないがしろにせず、積極的に情報を集めてみてください。・・・最後に、大学受験がゴールではないと私は考えています。合格することだけが正解なのではなく、不合格であっても次やるべきことが明確になるので正解だと思います。それに、大学と職業が直結しているわけではないように見えます。どこの大学に行くか以上に、将来社会的にどのような役割を自分に課すかの方が大切だと思います。みなさんの強みが活かせるような進路に出会えることを願っています。</p>	<p>私は、3年生の春頃に志望大学を決め、大学について調べていく中でさまざまな受験方法があることを知り、学校推薦型選抜で志望する大学を受験しました。その受験では、小論文と面接があり、先生にほとんど毎日指導していただきました。また、インターネットで受験対策を調べ、友達と面接の練習もしました。対策する期間が約3週間しかなかったので、受験勉強をする時間との区切りをつけて1日1日を過ごしました。小論文では、英文による出題があるため、英語の学習にも力を入れました。私は運動系部活動に所属していたので、限られた時間の中で効率良く勉強することを常に心がけてきました。・・・学校推薦型選抜はメリットだけではなく、デメリットもあります。それは、共通テスト対策の勉強時間が減ってしまうことです。そのため、先生や家族と相談をよく考えた上で、受験の計画をたてるべきだと思います。・・・また、長良高校の先生を頼ることが大切です。たくさん相談すればするほど、自信が付き、知らなかったことも多く知ることができます。長良高校の先生は質問をしたら常に親身に考えてくださると思うので、ぜひ頼ってください。</p>
部活動を最後までやりぬく	入試方法の研究
<p>私は志望大学に学校推薦型選抜で合格しました。文化系部に所属し、8月半ばまで部活動に打ち込むなかで、部活動と勉強の両立はとても大変でした。・・・共通テストでは自己ベストどころか最低限取りたいと思っていた点数にも届きませんでした。悔しすぎる結果を受け入れられず、ずっとめざしてきた志望大学合格を諦めかけている自分がありました。しかし、先生方がまだ終わってないよと励ましてくださり、第一志望合格に向けて気持ちを立て直すことができました。私は多くの方に支えてもらったからこそ、気持ちに応えたい、絶対合格したいという思いを持つことができ、毎日面接練習を重ね、合格することができました。最後に、今部活動を頑張っている人はどんなに引退が遅くても最後までやり抜いてください。部活動を最後まで頑張ったことや実績は学校推薦型選抜で評価してもらえ、なにより自分の強みになりました。・・・地道に重ねた努力はいつか自分に返ってきます。どんなことでも最後まで諦めず頑張ってください。</p>	<p>私は推薦入試で志望大学に合格しました。しかし、受験2カ月前まで、志望校が定まっていませんでした。・・・出願を決めたその日から、私は受験対策に勤めました。試験の詳細は、口頭試問を含む面接などでした。しかし、面接のみならず志望理由書などの書類を準備するのも大変でした。いざ、面接練習を始めようとしたとき、私は何も話せませんでした。私の場合は理工学部なのでコンピューターやテクノロジー関連のニュースを毎朝見ることが習慣化し、何度も面接担当の先生の指導を受けていました。今思えばあの時間ほど充実した面接練習は今までになかったと思います。・・・最後になりますが、私がみなさんに伝えたいことは、周りの人間に差をつけろということです。特に身近なものでいえば、長良高校が力を入れている英検の取得です。私自身この資格に助けられましたし、このような資格は一生役に立つので、挑戦することをおすすめします。</p>

**管理職や養護教諭を含め
教員全員で小論文・面接を指導**

80名もの希望者を指導するため、同校では全校体制を整えている。志望理由書は基本的には担任が指導するが、小論文・面接の指導は全校体制で行っているという。「学年関係なく、管理職や養護教諭も含め指導してもらっています。養護の先生に指導をお願いする際は看護系志望の生徒を受け持つってもらうなど、指導に当たる先生の教科や専門性を見ながら、マッチングを行っています。

マッチングする際には、先生方にどのような系統の指導を希望するか事前に調査を行っているので、それも勘案して割り当てています。小論文と面接は別の教師になる場合もありますし、同じ担当になることもあります。また、面接指導を重ねていくと慣れが出てしまうので、担当教師をチェンジしたりすることもあります」という。

『長良スタイル』を確立するにあたっては、学校長自らが総合・推薦型選抜を希望する生徒の指導を行い、合格に導いたうえで「自分も指導を担当する。全員で指導しましょう」と職員会議で宣言し、現在の教師フル稼働での指導体制になったという。

多くの先生による日常的な指導風景が 全校で指導に取り組む原動力に

このように教師が一丸となった指導が実現できる背景を、富田先生は次のように話す。

「管理職も担当していることが全職員にわかるようにしていることや、10月以降、私立大学出願者を含め、廊下などいたる場所で小論文や面接の指導をしており、他の先生が指導する様子を日常的に見ていることが大きいと思います。その光景から、新しく赴任した先生も、特別に説明しなくても、本校の方針を理解していただけます。新任の先生からも、本校では1年目から小論文や面接の指導を担当できてよかったという声をいただいています」

また、全校体制で指導するにあたり、若手教師や指導に不慣れな教師の指導力向上のため行っていることについて何うと、「指導は職員室で行うこともあるため、ベテランの先生がどのように指導し、アドバイスするか自然と聞こえてきます。これは指導に慣れていない若手の先生にとっては生きた教材といえるでしょう。今年度は県から進学指導重点校に指定されたことを活用し、生徒向けだけでなく、教師向けにも外部講師を招き小論文指導研修会を2回、面接指導研修会を1回行いました。また、受験結果は良くても悪くても必ず担当した教師に直接報告することになっており、他の先生が担当した生徒を含め、合格のお礼を言う生徒や、不合格でも次の選抜方式で頑張るといふ決意を述べる生徒の姿を見るのも、忙しくても生徒のために指導しようというモチベーションにつながっていると思います」という。

ありとあらゆる場所で小論文・面接指導が行われてい

ることで、教師全体のレベルアップにつながるほか、全校体制で臨んでいる姿や熱意が生徒にも伝わり、国公立大学の総合・推薦型選抜合格者の増加につながっているのだろう。

部活動の先輩や担任以外からのアドバイス 教師の連携など人間関係が強み

さらに、合格につなげるのに大きな力となっているのが、同校全体の人間的なつながりである。

生徒は担任や教科担当の教師に限らず、進路や学習に関する相談や質問に行ける雰囲気があり、部活動の顧問教師がアドバイスすることもあるという。

「文武両道を実践するのが長良高校だと生徒に話していますが、3年生の担任をしながら運動系の部活動の顧問を受け持つなど、教師も文武両道を実践しています。また、教師同士のコミュニケーションもかなり活発です。職員室は大部屋なので、進路指導に迷った際には、3年生の担任を経験した教師に相談することもあります。なお、前年度3年生の担任から、うまく指導できた事例やうまくいかなかった事例を共有する職員会議を行い、全職員にフィードバックしています。教師は異動によって入れ替わりますが、本校ではこうした空気が醸成されているため、引き継ぎもうまくいっているものと信じています。指導は教師一人ひとりの力によるものですが、全体としては“チーム長良”の総合力が生きています」

ここ5、6年は、一般選抜を含めた国公立大学合格者100名以上を目標としてきたが、すでに達成できたことから、岐阜県、愛知県の国公立大学に50名合格という目標を今年度現学校長の発案で新たに追加したという。

そして富田先生は、目標に向け国公立大学の受験に総合・推薦型選抜を有効に活用しつつ、引き続き「チーム長良」で指導に当たっていきたい、と抱負を語ってくれた。

岐阜県立長良高等学校

◇所在地：岐阜県岐阜市長良西後町1716番地1

◇創立：1949(昭和24)年

◇卒業生数：2022年3月卒業生359名

◇卒業生の進路：国公立大103名／私立大221名／短大12名／専門学校11名／就職1名／その他11名

全教員で指導に取り組み、校長先生も面接に協力 一般選抜をめざす生徒にも好影響

茨城県立太田第一高等学校

Point

- ✓ 全校指導体制に改革し、特定の教科や学年に集中していた指導の負荷を分散
- ✓ 学力重視とは異なる“学びに向かう力”の評価指標のためにテストを活用
- ✓ 総合・推薦型選抜の指導は、一般選抜をめざす生徒の進路研究にも好影響

2021年度から始まった指導体制の改革

茨城県立太田第一高校は、現在の水戸第一高校の太田分校として1900年に発足した歴史ある進学校だ。2020年度には附属中学校を開校し、国際教育・科学教育・探究活動を柱とする併設型中高一貫教育校として新たなスタートを切っている。中高一貫6年間の教育になったことを機に、現在の鈴木清隆校長が探究型学習に力を入れるため探究推進部を設置、学校として新たな取り組みを進めているところである。なお、鈴木校長は、民間企業や大学での研究職などの経歴を持ち、附属中学校開設に伴う公募で副校長として着任した、いわゆる民間人校長だ。

太田第一高校は、前述のように歴史ある進学校のため、現在でも一般選抜で大学進学をめざす生徒の方が多い<図表1>。しかし、近年は総合・推薦型選抜を希望する生徒も増えている。さらに、高校として探究型学習を推進していることもあり、今後はさらに総合・推薦型選抜を希望する生徒が増えることも考慮し、2021年度より総合・推薦型選抜の指導体制についての改革を始めている。

2021年度、まず行ったのは小論文の指導体制の改革である。2022年度からキャリアサポート部（旧進路指導部）部長を務める菅井洋実先生は、以前の指導体制を次のように振り返る。「一昨年までは主に国語科の教員が中心となって、総合・推薦型選抜の小論文指導を進めていました。英語が必要な小論文は英語科の先生も指導していましたが、多くは国語科が担っていました。私は国語科ですが、3学年を担当したときの小論文指導の負担は非常に重いものがありました」と語る。その体制を変



キャリアサポート部長 3学年主任
菅井洋実 先生 金氏明美 先生

えたのは、菅井先生の前任の進路指導部長だったという。それまでの、国語科や学年を中心とした指導体制から、全教科、全学年の先生が、それぞれの専門性を生かして小論文指導を行う体制に改革したのだ。

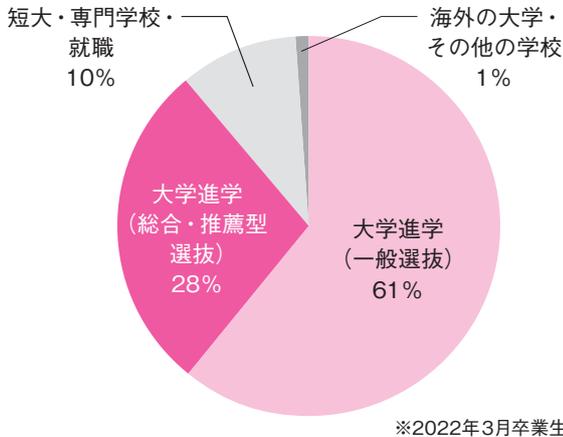
新しい仕組みは、小論文指導を希望する生徒を取りまとめ、リスト化するまではキャリアサポート部が行う。キャリアサポート部が作成するリストは、生徒が志望する大学の出題傾向別に整理されており、それに基づいて依頼する教科を決めている。教科内での分担は各教科の裁量だ。

これによって、家庭科の先生が食物健康や児童教育、体育の先生がスポーツ科学系やリハビリテーション系のテーマなど、個々の先生方の専門性を生かした小論文指導が可能となった。菅井先生も「この方法がすぐに結果に結びつくかどうかはまだわかりませんが、学校全体で指導していくこととなり、とても良かったと思います」と話す。

主体性等評価にも資する指標を模索

現3年生の小論文指導は、1年次より学年全体で進め

図表1 進路決定者(172名)の内訳



られてきた。1年生の1月には全員が小論文テストを受験し、小論文の作成と添削指導を経験する。そして、2年生の1月に再び全員が小論文テストを受験するが、時期的には文理分けの後でもあるため、進路を意識したテーマを各自が選択するところが1年次との違いだ。小論文テストを受験する前後には、事前研修と事後研修を行い、小論文として書くべきポイントや各分野の中で大事なポイントなどを学習する機会も設けている。

さらに、3年生の4月には、河合塾の「思考力・表現力テスト」<図表3>も受験する。これには小論文指導に加えて、もう1つの目的がある。それは、生徒たちの主体性等の評価に活用することだ。3学年主任の金氏明

図表2 3年間の主な進路指導の流れ

学年	時期	指導内容
高1	1月	小論文テスト(小論文の作成と添削指導の経験)、事前事後研修
高2	11月	河合塾「思考力・表現力チェック」
	12月	志望理由書の書き方に関するワーク
高3	1月	小論文テスト(進路を意識したテーマを選択)、事前事後研修
	4月	河合塾「思考力・表現力テスト」
高3	9月	総合・推薦型選抜 個別指導(小論文・志望理由書・面接指導)

美先生は「このテストの評価結果を生徒たちの学びに向かう力などの評価指標のヒントにできないだろうかと考えました。従来の学力重視の指標だけではなく、これからは総合型選抜などを志望する生徒の評価指標が必要になります。テストの結果から、推薦書や調査書などの作成に資する有用な情報を得ることも導入の大きな理由です」と話す。「思考力・表現力テスト」は、5つのability(知識活用力、読解力、発想力、構成力、表現技術)による評価指標で添削・評価を行い、その後の学習や思考力・表現力の育成に活用できる枠組みが用意されている<図表4>。実際に導入した結果、当初考えた通り、推薦書や調査書の作成に活用できているようだ。

図表3 河合塾「思考力・表現力テスト」の概要

基礎標準

思考力・表現力テスト

+

スタートアップガイド／
学習動画／学習の手引き

実施前

テスト

実施後

スタートアップガイド／限定事前動画

学習時間：30分程度
問題選択のガイドや解法のヒントを提示

総解答字数

600字以内

解答時間

1題60分

テスト

解答時間：60分～120分
特定教科に限定されないテーマで出題される総合的な記述問題
6題の中から1～2題を選択

出題テーマ

① ノンジャンル

③ 図表分析型

⑤ 社会系

② 英文問題

④ 医系

⑥ 人文系

※全6題から1～2題選択解答

添削答案

経験豊富な河合塾の採点者が、5つのabilityによる評価で答案を添削

学習の手引き／限定事後動画

学習時間：30～60分
学習シーン：校内(授業)評価の見方やテーマ、問題解説、採点基準などを掲載し、より良い答案作成のヒントを明示

現3年生は、入学時から「総合的な探究の時間」に取り組んできた。また、コロナ禍で計画は変更となってしまったが、修学旅行にも探究的な要素が含まれるようなプログラムを組むなど、「チャンスがあればできるだけ探究活動に結びつけられるよう、1年生のときから取り組んできました」（金氏先生）と話す。その結果、総合型選抜の受験者は昨年の24名から29名に増えている。これは学年全体の人数が昨年の184名から171名となっていることを考えると、比率は明らかに増えている。この他にもポートフォリオにも取り組んでおり、「1年生のときから普段の学習の取り組みだけでなく、部活動、委員会活動、学校行事などのタイミングを見て、ポートフォリオに記録するよう指導して、生徒個人の主体的な姿勢を促す取り組みも続けてきました」（金氏先生）とのことだ。

志望理由書・面接の指導も全校体制

ここ数年で国公立大学の一般選抜でも志望理由書を課す大学が増えている。そこで、現3年生は一般選抜志望者も含め、全員が一度、志望理由書を書いている。2年生の12月に志望理由書の書き方に関するワークを実施し、1月に担任に志望理由書を提出する。金氏先生は「この段階では、志望大学を決めていない生徒もいますので、どのような学部に進みたいかという内容で志望理由書を書いてもらいます。大学の情報についても深めることを求めていますので、とてもワークの時間内では書き切れません。そのため1月提出にしています」と話す。

また、講演の際には生徒の視野を広げるため、大学生の就職活動の際に社会から求められる力などについても触れる。「何のために大学に行くのかなど、人生観を含めて考えることができ、生徒たちの心持ちは変わったと思います。ちょうど同じ時期に小論文テストを受けていますが、進路に合わせたテーマで書いていますので相乗効果があったと思います」（金氏先生）

大学進学を希望しない生徒がいる場合は、これから先も学び続けるとしたらどのような分野を学びたいかという内容で志望理由書を書くよう指導するなど配慮もしている。金氏先生は「志望理由書には、これまでの高校生活の振り返りの意味もありますので、全員に取り組んでもらいました」と話し、ここでもポートフォリオを活用しているそうだ。

小論文指導は前述のように全校体制で行われるが、本格的な個別指導が始まるのは3年生の9月となる。小論文の個別指導と同様に、志望理由書と面接の個別指導も行われる。この志望理由書・面接指導も全校体制での実施である。菅井先生は「小論文指導と同様、各教科にお願いをして各教科内で担当を分担していただいています。そのため、小論文指導と同じ先生に見ていただく場合もあれば、志望理由書・面接指導は別の先生に見ていただく場合もあります」と話す。生徒にとっては初めて指導を受ける先生となる場合もあり、一定の緊張感が生まれるそうだ。

さらに、2021年度からの試みとして、校長先生や教頭先生にも国公立大学の総合・推薦型選抜の受験希望者の

図表4 河合塾「思考力・表現力」シリーズの5つのability



面接をお願いしている。金氏先生によると「数多くの面接指導を受けた後とはいえ、最後のタイミングでこれまで全く話をしたことがない校長先生の面接を受けるので、生徒はかなり緊張しています」という。しかも、面接は校長先生と生徒だけのマンツーマンだ。生徒にとっては心理的な負荷が大きい。「それを乗り越えたことによる達成感によって、本番に向けての安心感も持てます」（金氏先生）と効果が大きいという。まさに全校体制なのだ。

一般選抜をめざす生徒にも好影響 課題は志望理由書の指導と推薦書

総合・推薦型選抜を見据えたさまざまな指導は、一般選抜をめざす生徒に対しても良い影響を与えているという。1・2年生のときから小論文や志望理由書の指導を受けたり、学部研究や大学研究が求められたりしていることから、進路や志望大学選びに対する意識が高い生徒が増えた。中には複数の志望大学を徹底的に調べ上げ、研究ノートの形に仕上げている生徒もいるようだ。そこまで詳しく研究しているため、学修内容はもとより入試の配点も頭に入っている。金氏先生も「オープンキャンパスに行く必要がないぐらいに詳しい」と話しながらも笑みがこぼれる。

ところで、近年は国公立大学など他大学の一般選抜との併願を認める私立大学もあるため、総合・推薦型選抜ですでに合格していても一般選抜に向けての勉強を続けている生徒もいる。こうした生徒の存在も良い刺激となり、総合・推薦型選抜ですでに合格した生徒と一般選抜をめざす生徒が混在する中、最後まで学習を続ける雰囲気作りができています。

指導体制の改革などによって指導は順調に進んでいるように見えるが、課題もあるという。その1つが出願書類で必須の推薦書だ。推薦書は各クラス担任が作成することになるため、希望する生徒が増えればそれだけ量も増える。推薦書に書く内容は生徒によって異なり、また、出願する大学によって書式も異なる。さらに出願の締め切りがほぼ同時期に集中するためクラス担任の負担は非常に重いといえる。

そして、もう1つの課題は、志望理由書の指導である。一度は全員が志望理由書を書く経験をしているとはいえ、

初めは志望理由が不明確な生徒が多い。それを精緻な内容にまで高めるための指導には時間もかかる。前述のように初めて顔を合わせる先生と生徒もいる中で、指導担当の先生が生徒のことを理解するためには一定のコミュニケーションの量も必要となる。金氏先生も「生徒には最低でも10回はやり取りするから覚悟するようにと話していますが、それは裏を返せば、指導を担当される先生方にとっても大きな負荷となるのです」と語り、悩ましい問題でもある。

指導を受ける生徒にとっても負担が重いため、中には途中で投げ出す生徒もいるようにも思えるが、実際はどのようなのだろうか。「私もそれを心配していましたが、1人も出ませんでした。泣きながら頑張っている生徒もいましたが、自分で決めたことだから最後まで続けますと言いつちりました。絶対に受かってほしい」と金氏先生は話す。先生も生徒も必死なのだ。

今後の学校全体の課題は、中高一貫校として中学1年生から6年間のキャリア形成をサポートすることだ。進路指導部がキャリアサポート部となったことにはそうした意味が込められている。

菅井先生は「中学1年生から高校2年生までに対して、職業観を醸成すること、さまざまな世界を知ること、起業家精神を養うことなどを目的とした、本校独自で行う意思決定の力を養うためのさまざまなキャリアプログラムを用意しています。まだ始めたばかりですが、生徒には非常に好評です」と話す。4年後、5年後を見据えた取り組みが今年から始まっている。太田第一高校の改革はこれからもまだ進化していく。

茨城県立太田第一高等学校

◇所在地：茨城県常陸太田市栄町58番地

◇創立：1900(明治33)年

◇卒業生数：2022年3月卒業生183名

◇卒業生の進路：国公立大37名／私立大115名／短大2名／専門学校12名／就職4名／その他13名